
魔女と使い魔のバタバタな日々

ルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と使い魔のバタバタな日々

【Nコード】

N7402L

【作者名】

ルナ

【あらすじ】

魔女・スピカールーンは、使い魔さがしのため、オークション会場へと足を運んだ。

その際に、使い魔候補の、綺麗な魂の持主を発見、彼を落札した。彼らの生活が今始まる。

魔女は真っ白な宝物を見つける

魔女・スピカールンは、本人曰く、悪魔的な魔女である。

本当は心優しく繊細だというのは、彼女の親友、

リイラールコルラッジだけが知っている。

スピカは急に使い魔を持ちたくなり、人身売買を行っている、オークション会場へとやってきた。

壇上には、痩せた中年の男と、売り物らしき美しい少年がいた。

背丈は小柄で、透き通った青い瞳と、鮮やかな金髪が印象的だった。不安そうにキョロキョロとあたりを見回し、金持ちらしき人々を見やっている。

スピカはじいつ、と少年を見た。きれいだ。見た目はもちろん、中身、魂さえも。

この子に決めた。スピカは本人曰くニヤリと、他の人曰くにこりと、笑った。

スピカは雪のような髪をツインテールにし、

宝石のごとくきれいな紅い瞳をした、

とてもかわいらしい魔女だった。

が、本人がイメージする魔女との相違のため、

彼女は悪魔的というのを多少無理にでもつらぬこうとする。

本来動物などを主流とする使い魔に、人間を選択したのもそのせいだ。

スピカがぼうっとしている間に、オークションはすでに始まっていた。

「五千ヌフが出ました！ 他に入札の方はおられませんか！？」

「一万ヌフ」

まさに銀の鈴のような声がスピカの口からこぼれ出た。一瞬、会場がしん、となる。

少年がスピカの方を見た。スピカの紅い目と、少年の青い目がか

ちあつた。

彼の顔が、助けを求めるようにスピカを見つめる。

彼女はにっこりと笑うと、彼にだけ分かるように頷いて見せた。

と、さつき五千で入札した男が二万、と言った。

スピカが五万と言い、二人の小競り合いが始まる。

最終的に、スピカが百万オンスでその少年を落札した。

ギョツとしたように、競り合っていた男が静かになる。

この世界には、お金は四種類あり、銅貨がカトル、銀貨がサンク、金貨が

ヌフで、さらに上級金貨というものがあり、それがオンスだった。

かなりの金持ちでも、そうそう持っているものではない。

これは彼女が幼いころから使わずためていた、全財産だった。

が、彼女にとって、お金にさほどの価値はない。

それよりも、本当に真つ白な清らかな魂の持主、この少年こそ、彼女には、

かなりの価値のあるものだった。そのためならば、いくらだろうと構わなかった。

見た目は綺麗でも、中身が真つ黒、もしくは少し汚れている、という人間はかなり多い。

私は運がよかった、とスピカは思った。

ホッとしたように、少年がこちらに笑顔を向ける。

彼女は笑顔で少年に手を差し伸べ、少年は赤くなって彼女の手を取った。

魔女は真っ白な宝物を見つける（後書き）

なにぶん初めてなので、なにか不備がありましたら、
ぜひご忠告をお願いします。

使い魔は主に恋をする

買われた少年は、名をアルト・ハルメリアと名乗った。

元は貴族の少年だったが、いきなり誘拐され、

人身売買を生業とする男に売られたのだという。

「あの、僕、何をすればいいんですか!？」

そういう少年・アルトに、スピカ・ルーンはただ笑った。

少年曰く妖艶な感じに。かわいらしいのに、

その顔は何故か良く似合っていた。

「なにもなくていい。君が好きなことをすればいい」

「好きな……こと……?」

「そう。私が君と築きたいのは、そんなうすっぺらい

関係ではないから」

と、ぴたりと彼女は足を止めた。自分の住みかを見つけたからだ。

木と土を使って魔法で立てられた館は、

井戸や畑や鶏小屋と共にそこに存在していた。

館に入りかけたスピカは、少し考え、アルトの所へやってきた。

少年にしては少し白い手を取り、口づけする。

ギョツとなり、顔を紅潮させる彼の前で、手と足に

はめられた鉄製の枷が破壊された。

満足そうに頷き、スピカは館に入っていく。

驚いたように目を見開いたまま、アルトも彼女に続いた。

「あなた、魔女なんですか?」

「そう。悪魔的な、ね」

アルトは青い目をきらきらと輝かせ、スピカは得意そうに言った。

が、次の彼の言葉に眉根を寄せた。

「そんなの嘘ですよ。あなたは、ちっとも悪魔的じゃない。

だいたい、僕を助けてくれたじゃないですか」

「助けた訳じゃない。君が、貴重な存在だから買ったただけだ。使い魔にするために」

「使い魔？　なんです、それ？」

「魔女に仕える僕しもへのようなものだよ。

君、私と契約をする？」

アルトはこくり、と頷いた。してもしなくても、行く場所がない以上、ここにいるしかない。ならばした方がいいと思えた。彼女がそれを望んでいるなら、そうした方がいい、と。

「契約をします」

「賢明だね」

スピカの可憐な顔がアルトに近づいてくる。訳が分からない彼女に、彼女は説明もせぬまま、桜色の唇を彼の唇に重ねた。

熟れた果物のように、アルトが赤面した。

と同時に、体中から力が溢れてきて、立っていらなくなり、その場に膝をつく。

「契約完了」

そういつて微笑む彼女は、やはり悪魔的かもしれない。

アルトはそう思ったのだった。

使い魔となったアルトの初仕事は、井戸から水を汲むことだった。
主マスターが、風呂に入りたいと言ったのだ。

あまり力がないので、出来るか不安だったが、それは杞憂だった。契約をして力を得たからか、いともたやすく出来たのだ。

水をたつぷりと満たした桶は、全然重くない。

羽か子猫でも持っているようだ。

主マスター、水を汲んできましたよ」

「スピカでいい。次からはそう呼ぶように」

キッと睨まれ、アルトは肩をすくめた。はい、と返事をして下がるうとすると、スピカが平然と言った。

「一緒に入るか、アルト？」

「はい！？」

アルトの顔が、これ以上ないほど紅くなった。
夕日だってこんなに紅くはないだろう。

アルトだって年頃の男の子だった。

いきなり一緒に風呂に入るか、と聞かれて、
紅くならない訳はない。

「そうか。入るか」

「入りませんよ！ や、やめてください、そういうこと言うの。
ぼ、僕も男なんですよ！！」

「男が女と風呂に入るのに、何か問題でも？」

「あ、ありますよ！ とにかく駄目です！ 入りません！！」

からかっているのか、とスピカを睨むと、

彼女は何故怒っているのだろう、と不思議ふしぎそうな顔をしていた。

アルトは相当に風変わりらしい、と幼い女主人に対しての評価を
そう

くだし、そのまま浴室から逃げ出した。

アルトは彼女についてきて、契約したことを早くも後悔し始めて
いた。

彼女はいろいろなことに無頓着なのだった。

風呂からあがったそのままの姿でうろついたり、研究に夢中にな
ると

飲食を忘れたり、主人というよりは、

何故か動物の世話をしている気分

にアルトをさせた。

「す、スピカさああああん！！ なんてカッコしてるんですかああ

ああ

ああああ！！」

「なんてカッコって？ 私のローブ早く取って」

「早く着てくださああああい!!」

目をやり場に困ったアルトは、慌てて白いローブを彼女に押し付けた。

首をかしげながら、スピカがそれをはおる。

白い髪をとかし、二つに結び分けると、星の形をした髪飾りを二つ、髪に

飾った。きらきらと、本当の星のようにきらめいている。

「綺麗ですね、それ」

「リイラがくれたんだ。これはいつもつけてる」

「リイラって誰ですか？」

「リイラ」コルラツジ。私の親友。最近は来ないけど、いつも食事の用意とかしてくれるんだ」

「最近ってどのくらい来てないんですか？」

「一週間くらいかな」

「一週間!? その間、食事はどうしてるんですか!?!」

「食べてない。面倒だし、私は作れないし」

アルトはギョツとなった。食事を食べていない?

こんなに細くて折れてしまいそうな体つきなのに?

「駄目じゃないですか!! 僕、すぐに何か作りますから、

ちゃんと食べてください!!」

「まだ研究が終わっていなー」

「研究より食事の方が大事ですっ」

あきらめたらしく、ようやくスピカは頷いた。簡単なスープとパンだけ

を作り、アルトはぱたと働いた。

少し埃のたまっている部屋を掃除し、

積んである洗濯物を洗い、ピカピカに床を磨き上げた。

と、当たり前のように与えられた食事を食べていたスピカが、あ、と小さくつぶやいた。

「どうかしました!?!」

「リイラのよりおいしい……」
アルトは嬉しそうに笑った。屋敷にいたころより、
この方が自分の居場所なのかもしれない。彼にはそう思えた。
スピカⅡルーンの隣こそが。

使い魔は主に恋をする（後書き）

やっと次話を投稿できました。これからどんどん増やしていくので、どうか見てください。

モノローグ　主になった訳

スピカ＝ルーンは、村の近くの森で一人、暮らしていた。親友であるリイラ＝コルラツジしか来るものはおらず、彼女は孤独な人生を生きてきた。依頼で薬や毒薬・惚れ薬を作ったり、研究したり、人を殺す場合もあった。

スピカは親友の言葉以外に耳を傾けることはなかった。村人が何を言おうと、また依頼先で中傷ちゅうじやうをなげられようと、無視を決め込んでいた。

そんな彼女が、使い魔を欲したのは、あいにくさみしかったからではない。リイラと、もう一人、仲良くしてくれる少女、レティーシャ・エルト・モランの忠告を受け入れたからだ。

愛称をレティという、このモラン王家の姫君は、スピカを擁護ようごし続けるせいで、悪魔つきなどという悪評を流されても、なかよくしてくれるのだった。

使い魔の話が出されたのは、三日前、リイラと共に城のお茶会に招かれた時のことだった。

「ねえ、スピカ。スピカって、使い魔とか弟子とかいないの？」

亜麻色の髪に黒い瞳、美人というよりはかわいいタイプのレティは、くりくりとした目でスピカを見ていた。

「物語とかじゃねえ。いつも何か手下とかがいるんだよ」

「手下、ねえ」

好物のチョコレートケーキを頬ほりながら、スピカは肩をすくめた。

「興味がないよ。私は一人でいい。リイラもいるし」

「かわいいこと行ってくれるわねー！！」

そう言った後、スピカはリイラにぎゅうつ、と抱きしめられていた。

不快ではないので、抵抗はしないでおく。

リイラは大人びた少女だった。ブルネットの髪を最新流行の形に編み上げ、

オシャレなリボンをいつもつけている。

スピカのツインテールに飾ってある、綺麗な星の髪飾りは、彼女が選んで

贈ってくれたものだった。趣味ではないが、彼女がくれたのでつけていた。

「でも、手下がいないと、悪魔的な魔女じゃないよ!!」

ぷつと頬をふくらませ、幼い姫は反論した。変わり者でもある彼女は、

スピカ同様、悪魔的な魔女に憧れている。

「あのねえ、別に悪魔的にこだわらなくても」

あきれ顔のリイラ。キツと二人が睨みつけた。

「リイラには分からないんだ!! 私たちの気持ちが!!」

「ごめん……私が悪かったわ」

リイラは思わず謝った。彼女たちが必要以上に悪魔的にこだわるのは、

見た目も影響しているのだ。レティはまだ八歳なのでこれから見た目も

変わるかもしれないが、スピカはこれ以上成長できない。

十五歳なのだが、十歳ぐらいの見た目と背をしているのだ。

それは、リイラのせいでもある。リイラが呼び出してしまった悪魔と取引をし、魔女になったせいで、成長が止まったのだ。

「とにかく、私はやっぱり使い魔をつくる! それも人間の」

「それこそ悪魔的だよ!! スピカ!!」

レティが抱きついてくる。きらきらと紅い目をきらめかせるスピカに、

リイラはあきらめたようにため息をついた。

モノローグ 主になった訳 (後書き)

前の話では何故使い魔をととしたのかわからないので、ここで理由を書いてみました。スピカの親友の二人組も出ます。初登場です。

少女は魔女を憎悪する

使い魔少年、アルト＝ハルメリアの朝は、主^{マスター}

である、スピカ＝ルーンを起こすことから始まる。

スピカはひどく寝起きが悪い。部屋の戸を叩いても起きない。

大声を出しても起きない。ゆすつても、薄目を開け、また寝てしま
う。

そんな彼女を起こすことは不可能かと思われたが、
彼には秘策があった。

朝早く起きて焼いた、まだほかほかのチョコレートチョコレートの蒸しパンの
皿を持っていくと、ぱちり、と彼女は覚醒した。

寝ぼけ眼が彼の眼を捕える。アルトは赤くなった。かわいい。

「誰……？ あー、アルトか。おはよう、アルト」

「あつ！ ちょっと待ってください。そのまま起きたら
あぶなー！！」

少し高く作られた寝台から、スピカの体が落下した。

ギョツとなるアルト。が、彼が受け止めようと近づく前に、

スピカは謎の呪文を唱えて宙に浮いていた。

「私が魔女だつてこと、わすれていた？」

につこりと微笑まれ、アルトは脱力した。

草木染めの黒いローブに着替えたスピカは、もぐもぐと

蒸しパンを頬ぼつていた。いつものツインテールに結われた

白い髪には、やはり今日も星の髪飾りがきらめいていた。

「スピカさん、ちゃんとミルクも飲んでくださいよ！

蒸しパンをのどにつまませますよ！！ サラダもスープも残しちゃ

駄目ですからね！！」

アルトの声が飛ぶと、スピカはうつとうしそくに眼をすがめた。

彼女はあまり指図されるのが好きではない。

「うるさい奴が一人増えた」

それでも、砂糖をたっぷり入れたミルクを飲み、ポテトサラダと野菜スープをたいらげた。目を見開き、味を楽しむ。

アルトは日々家事の腕の才能を開花させていた。

料理も昨日より上手くなっている。

少し汚れていた館も、つるつるピカピカに磨かれていて、起きぬけの

目にはすこし眩しい。たまっていた洗濯物が、ひらひらと外ではためいていた。

この子にしてよかったかもしれない。

スピカは口には出さないものの、そう思い始めていた。

「今日出かけるから」

「はい？」

食事を終えた後、いきなりスピカはそう言った。

すっかり目が覚めたらしく、魔術で取り寄せた草の選別を開始している。

これは彼女の日課だった。薬を頼まれる依頼は多いので、お得意さんの

はいくつか用意するのだ。

「ごりごりと草をすりつぶし始めたスピカに、アルトは驚いて聞いた。」

スピカは聞こえなかった？、と首をかしげた。

「き、聞こえてます。聞こえてますけど、いきなりどうしたんですか？」

何かありました？」

スツと白い手が差し出された。アルトの手も白いが、それ以上に、まるで

日の光など浴びたことがないような、病的な白さだった。

そこにはピンク色のかわいらしい封筒があった。

紙はかなり上等で、王家の紋がおしてある。

「レティがお茶会をするって。リイラも行くらしいから、君もよかつたら、どう？」

「行きます！！……あの、でも、それ、モラン王家の紋章です、よね？ レティってまさか……」

さすがに貴族の息子なので、紋章を見たことがあるのだろう。こくり、とスピカは頷いた。

「そう。レティーシャ・エルト・モラン。モラン王家の姫」
言った後で、あ、とスピカが叫んだ。

同時に、紅い目でじろりと睨んでくる。

薬草をすりつぶしすぎたらしく、緑色の液体と化していた。

「君が話かけるから」

「僕のせいなんですか！？」

怖い顔で睨まれ、アルトは泣きそうになった。

あきらかに自業自得の結果なのだが、スピカは責任転嫁していた。舌打ちしつつ呪文を唱えて薬草を元の状態に戻す。

「元に戻せるんじゃないですか！」

「これは疲れるからあまりやりたくないんだ。なにより、また最初からやるのがめんどくさい。あーあ、君のせいだ」

「ひどいですよ、その言い方！！」

「使い魔は黙ってて」

カッとアルトが怒りで赤くなった。

「使い魔にも人権いや、使い魔権をください！！」

「何それ」

くっ、と魔女は笑みをこぼした。ムツとなりながらも、あまりにかわいらしいのでアルトはうつむいた。

と、次の瞬間。

ドンドンドン！と戸を叩く音がした。

「ちよっと！ 誰もいないのー！！」

「リイラ」

スピカはすぐに戸を開けた。彼女の親友、リイラ「コルラッジは、につこりと大人びた笑みであいさつした。

「ひさしぶりね、スピカ。今までこれなくてごめんね」

「ううん、いいよ。おばあさんは元気？」

「うん！ スピカの薬がよくきくのよ！！ …… あ、

この子が使い魔君？」

「アルト」ハルメリアです」

ぺこり、とアルトは頭を下げた。リイラが自己紹介をする。

「リイラ」コルラッジよ。スピカとはおさなじみなの。

よろしくね、アルト」

「あ、はい、こちらこそ」

こちらを見ていたハズのスピカの目が、

何故か嫌そうにすがるめられた。さっきまでご機嫌だったのに。

アルトはきよとん、となった。

「スピカさん、どうしました？」

スピカはアルトとリイラの間に入ると、キッと彼女を睨んだ。

「リイラ。これは、私の使い魔だぞ」

私の、を強く強調しながらスピカは言った。はたから見れば、嫉妬をしているようにも見える。

「別に、所有権を主張しなくても取らないわよ？」

あ、ひよつとして、スピカ、ヤキモチ？」

「違う！！」

ヤキモチと聞いてアルトはかなり期待したが、違う！と

叫ばれて落ち込んだ。そうだね、違うよね、

とぶつぶつ呟きながら。

うつむいていたので、彼は気づいていなかった。

魔女の耳が微かに赤く染まっているのに。

すっかり無口になったスピカの、古びたほうきに飛び乗り、
彼らは王都シュザリアへとやってきた。住民街を通ると石

を投げられるというので、遠回りして商店街へと行く。

そこで魔女は機嫌を直した。

万人受けしがたいような、ぶきみなぬいぐるみや、奇妙な形の宝飾品を次々と見ていく。

「本当に趣味が悪いんだから」

リイラのグチを聞き流し、商品の一つ手に取った、その時だった。

「魔女、スピカールーン、覚悟っ!!」

凜とした少女の声と共に、いきなりの白刃が彼女を襲った。

スピカがよけると、舌打ちと共にたくさんのナイフが投げられる。

魔女は全てをよけきり、さらに少女の手の中にあるナイフを全部たたき落とした。

魔女に抑えつけられ、少女はじたばたと暴れた。

「兄の敵！ 今こそ殺してやる!!」

スピカの力が緩んだ。そのすきを逃さず、上手く抜け出した少女は、エメラルドのはめられた高価そうな短剣を構え、憎々しげに叫んだ。

「絶対に許さないんだから!!」

「君の兄は、悪徳高利貸しで、多くのものに恨まれていた。だから殺したただけだ」

「確かに……」

少女は今にも泣きそうに顔をゆがめた。

「兄はあくどいこともしていた！ でも、あたしには優しかった！

むしけらみたいに、殺されていい訳がなかった!!」

スピカの体が小さく震えた。その顔が悲しみに染まったのを、アルトは見逃さなかった。が、それを上手く打ち消し、彼女は少女を睨む。

ギラリ、と紅い目が怪しく光った。

「ならば、兄と同じ所へ送ってやろう」

「スピカ！！」

「駄目！！」

手のひらから雷の玉を取り出した彼女は、思いがけず大きな声で怒鳴られ、目を見開いた。彼女の名を呼んで、止めようとしていたリイラも同様である。

「これ以上、傷つかないでください。あなたは、人を殺すたびに自分も傷ついているのでしょうか？ もう、やめてください」

スピカの顔が少女と同じになった。底知れない悲しみが、彼女の心を支配していた。ふっ、と玉も消滅した。

「逃げましょう、スピカさん！！ リイラさん！！」

スピカの手を取り、アルトが駆け出した。リイラが後を追う。

少女は咆哮する^{うごめく}ように叫んだ。

「逃げるのか、卑怯者！！ あたしは、絶対にあきらめないからな！！」

スピカが初めて殺した相手は、自分の父と母だった。

悪魔と取引をした後、教会の神父とその妻は、

娘を化け物よばわりし、殺そうとした。スピカは、恐怖した。

今まで自分を愛してくれていた相手が、武器を持つて襲い

かかってきたのだ。スピカは頭が真っ白になり、本能が

告げるまま両親を、変化させた爪で引き裂いた。

生きていた人間を、ただの肉塊に変えた。

気づいた時、スピカは血の海で倒れこんでいた。

肉塊を胸に抱いたまま。変化してしまった紅い目で、

リイラの姿を茫然として見ていた。

その後、彼女は一時期心をなくしたかのように、人を殺しまくっていたのだった。命乞いも、涙も、彼女の心を溶かすことはなかった。

その中の一人が、あの少女の兄だった。

人は私を悪魔的というが、本当は違う。

私は夜叉なのだ。いきいてもしようがないのだ。

そう思っていた彼女を救ったのは、

魔法の全てを教えてくれた師匠だった。

スピカは人を殺すのをやめた。森に館を建て、

そこにひきこもった。レティとリイラだけが、彼女を

恐怖の対象として見なかったことから、二人と

仲良くなった。が、人を殺さないということが

免罪符になる訳はない。憎しみは消えることはない。

もう、殺した相手は還ってなど来ないのだ。

少女は魔女を憎悪する（後書き）

途中からすごく重い話になってしまいました。
次回はあまり重くならないように
気をつけたいと思います。

男は魔女に求婚する

使い魔少年アルト・ハルメリアは、女主人とその親友と共に、お茶会の誘いを受けて城下町に来ていた。

いきなり命を狙われたため、三人で逃げてきたので、もうへとへとだった。

「スピカさん、平気ですか？」

「ん、だい、じょう、ぶ」

あきらかに大丈夫ではなかった。

彼女、スピカ・ルーンの顔はひどく真っ青で、まるで病気にでもなったかのようにだった。

実は、彼女は人を殺したらしいのだ。

その敵を討ちに來たのが、スピカが殺した男の妹らしい。アルトには彼女の事情は分からなかった。ただ分かるのは、スピカが人を殺したことで自身をも傷っている、ということだけだった。

「スピカ、もう今日は帰る？ どうする？」

彼女の親友、リイラ・コルラッジがスピカに聞いた。

スピカは黙って首を振り、かなり無理をして笑う。

アルトは何か言いかけたが、ギラリと睨まれては黙るしかなかった。

「行こう」

三人が歩き出した、その時だった。

どん！と一人の男が彼女にぶつかってきた。

スピカはバランスを崩しそうになり、リイラに支えられた。

「ぼけっとしてんじゃねえよ！」

邪魔だ。邪魔!!」

「そつちからぶつかってきたんでしょう!？」

リイラが男を怒鳴りつけた。スピカは何も言わず、男を無言で睨むように見やる。

男と目が合い、男の顔がみるみるうちに赤く染まった。

「お譲ちゃん、かわいいな。そのかわいさに免じて許してやらないこともないぜ」

「そりやあどうも」

無愛想にスピカが言い返す。リイラはまだ腹を立てていて、何よ、偉そうに!と小声で毒づいた。

「名前はなんて言うんだ? 俺はエトワール・クロウ・リルアラ。リルアラ子爵だよ」

「スピカ! ルーン……」

「スピカか……。お前、俺と結婚しないか?」

スピカが口を^オの形にしたまま固まった。

リイラがいきなり何言うのよ!!と怒鳴る。

そしてアルトは、むつつと頬を膨らませ、

男とスピカの間に割って入った。

「ちよつと! 僕の主を^{マスター}くどくの、

やめていただけませんか!？」

男はムツとしたらしく、アルトの胸倉を掴み、いきなり殴りつけた。アルトが吹き飛び、その場に叩きつけられる。

「俺になれなれしく口をきいてんじゃねえよ、

使用人ふぜいが!!」

カッとスピカの紅い目が怒りで燃え上がった。

冷たく、しかし熱い炎が、彼女の中で渦巻いていた。

彼女の怒りに呼応するように、鋭い雷がスピカの周囲で鳴り続けていた。髪飾りとゴムが彼女の髪からはじけ飛び、ばさり、と白い髪が逆立った。

「私の所有物^{モノ}を殴っていいのは、私だけよ」

バキツという鈍い音とともに、今度は男が殴られた。端正な顔に小さなこぶしが綺麗にめりこみ、

男はかなり遠くまで飛ばされた。アルトたちが目を丸くしている。スピカは何事もなかったかのように、ゴムと髪飾りをつけ直し、二人に目を移した。

「二人とも、行こう」

「あの、い、いいんですか、あの人……」

「どうでもいい」

その目にはまだ冷めぬ怒りがあり、二人は息を呑んだ。別に同情する理由もないし、スピカをこれ以上怒らせるのも怖いので、彼らは歩き出した。

十分ほど歩き、スピカたちはモラン城へとやってきた。雪のように真っ白な、うつくしい建築物である。

衛兵は、三人を見るなり笑顔になり、姫様がお待ちです、と満面の笑みで言った。城の人間には、恐れられてはいないようだ。アルトは少しホッとした。

「よくいらっしました！！」

城内に入ると、すぐにメイドがやってきて、彼女たちを案内してくれた。レティづきの腹心のメイドらしい。

高価な造りの戸をたたき、中に入ると、幼い少女がいきなり抱きついてきた。

「スピカ！。会いたかったよ！！」

「私も。レティ」

そこで、スピカはようやく本心からの笑みを向けた。

「この子がスピカの使い魔！？」

「そう」

レティは目をきらきらさせてアルトに質問を投げつけ、のべつものなしにペラペラとしゃべりまくり、アルトを閉口させた。メイドの少女が止める。

「姫、迷惑ですわよ」

「アカネは口うるさいの!!」

「姫のために言っているのです!!」

メイドの少女は、東洋人らしかった。珍しいまっすぐな黒髪はとても美しく、腰のあたりまで垂れ落ちていた。

肌はどこか黄色みがかっている。

きれいな少女だった。

アカネというらしき少女は、そつのないメイドだった。てきぱきとお茶の用意をし、すぐに下がる。

白いティーテーブルには、お茶を楽しむための準備がしつかりと並べられてた。

バラの模様の陶器のティーセットに、銀製の三段のケーキスタンド。

マカロンの盛られた皿。ケーキの大皿。

スタンドの上には、サンドウィッチ、スコーンやショートブレッド、ケーキがたくさん並べられていた。

メイドが行ってしまったので、変わりにアルトがリーフティーをカップに注いでいく。

良い香りが部屋中に立ち込めた。

今日のお茶は、甘めのミルクティーだった。

「何を取りますか、レティーシャさま」

アルトがトングを手にして言うと、

レティは頬をふくらませて言い返した。

「レティって呼んでよ」

「え、駄目ですよ、姫様ですから」

「アルトはスピカの使い魔でしょう!？」

スピカはレティって呼んでるんだから、

アルトもレティって言わなきゃダメなの!!」

二人が言い合いしている中、スピカたちは

すでに勝手にお茶会を開始していた。

スピカはチョコレートケーキ、リイラは
キュウリのサンドウィッチをチョイスして食べている。

「ああっ！！ 何二人だけで食べてるんですか、

スピカさん！！ リイラさん！！」

「ずるゝい！！ 二人とも！！」

「てゆうか、スピカさん食べるの早っ！！

小食なのに食べるの早っ！！」

「早くしないとなくなるわよ」

どんどんとケーキやスイーツが無くなっていく。

アルトは啞然とし、レティは涙目になった。

「スピカ、ちょっとは遠慮してよおっ！！ アカネ！！

ケーキとスイーツ追加！！」

「了解です、姫」

彼らのお茶会は、結局お茶の時間を大幅に超えるまで続いた。

「レティ、また誘ってね」

リイラが笑顔で手を振った。が、スピカはじいっとレティを見て
いる。

「どうしたの、スピカ？」

「レティ？ 言っておくが、これは私の使い魔だからね」

「どういうこと？」

訳がわからない様子のレティ。リイラがあきれ顔になった。

「あんた、何八歳の子に嫉妬してるのよ」

「ヤキモチじゃないっていつてるだろ！！」

「どう見てもヤキモチよ！！」

「全然ち・が・う！！」

ぎゃあぎゃあと言い合いながら二人はほうきに飛び乗った。
アルトもため息をつきつつ乗る。

着いてからも、二人はまだケンカしていた。

「じゃあ、私、帰るから。アルトと仲良くね」

「しばらく来るな！！ リイラっ！！」

「言われなくても来ないわよ。アルトがいるしね！！」

そこからはもう言語にもなっていないかった。

わめきたてるスピカを置いて、リイラは帰っていく。

アルトも洗濯物の様子を見るため、一時彼女から離れた。

「あゝ。まだかわいてないな」

サクツと木の葉を踏む音に気付き、アルトは振り向いた。

そこにいたのは、昼間の、スピカにいきなり求婚した男だった。

「どうして、ここにいます！？ まさか、僕たちのことつけていたんですか」

アルトは鼻白み、男を睨みつけた。はっ、と男が鼻で笑う。

「そんな不遜なことするかよ。金があれば、スピカールーンの居場所を吐く奴らなんて、数多くいるんでな」

「そっちの方が不遜ですよ！！ スピカには近づかないでください！！ 彼女は僕の主です！！」

「安心しな。今用があるのは、お前だけだ！！」

「あぐっ！！」

再び殴られ、アルトは即席の物干し台に頭を強打した。

口が切れ、げぼげぼと血を吐く。

男は容赦なくアルトを蹴りつけた。彼が小さく悲鳴を上げる。

「調子にのってんじゃねえぞ！！ この下級貴族が！！」

上級貴族の俺様によお！！」

ざあつと雨が降り出した。つめたい雨が二人に降り注ぐ。

アルトは洗濯物が、とこの場に場違いなことを考えたが、今は動ける状態ではなかった。

「私の所有物を殴っていいのは、

私だけって言わなかった？」

そこに、氷のように冷たい声が飛んだ。

男は罰が悪かったらしく、慌ててアルトから足をどける。

だが、スピカの怒りはおさまらなかった。

「私、バカと愚かなやつは嫌いなんだよね。」

両方該当するお前は、殺してやる！！」

ザクツとかまいたちが男の足を切り裂いた。

否、生地が厚かったため、服のみを切り裂いた。

「ひ、ひいつ……ゆ、許してくれ！！」

「だーめ。ぜつたいに、ゆるしてなんかあげない」

「スピカさん！ 駄目ッ！！」

アルトがスピカの足にしがみついた。さすがに彼を蹴り飛ばす訳にはいかず、スピカが止まる。

「なぜ、邪魔をする！」

「あんなやつのために、スピカさんが、きずつか、ないで……」

アルトはそのまま気を失った。キツとスピカが男を睨む。

「アルトに感謝するんだな。見逃してやる」

スピカは男を置いて、抱き上げたアルトとともに館へと帰って行った。

一週間後。

「スピカ！！ルーン！！ この前はすまなかった！！」

謝る！！ そいつには優しくする！！

だから俺と結婚してくー」

「黙れ、下種がー！！」

「ぐふああー！！」

スピカの館には、あの男の姿があった。

彼女のパンチがヒットし、敷石に頭をぶつける。

どうやら、あきらめる気はないようだ。

アルトは思わず、殺すのを止めるんじゃないかと、と黒いことを考えてしまうのだった。

男は魔女に求婚する（後書き）

別名、アルトにライバルを作るの巻きが完成しました。
彼にはまだまだ強くなってほしいので、
こういう形で試練をしかけていきたいと思います。

魔女は再び狙われる

使い魔アルト「ハルメリアは、今日は朝から機嫌が悪かった。

なぜなら。

「スピカ」。お前が好きだ。」

俺はお前を愛してる。」

とか変な節をつけて歌うバカ様（嘘、若様）がいるからだ。顔だけは無駄に美形な彼は、スピカに惚れたらしく、

熱烈なアプローチを開始していて、

はつきり言ってスピカにもアルトにも大迷惑だった。

「麗しい顔をどうか見せておくれええええ。」

俺のスピカあああああ。」

「うるさい」

この館の女主人、スピカ「ルーンの声とともに、大量の水流が男に振りかかった。

がぼがぼと言いながらまだ歌おうとする、

貴族の坊っちゃん、エトワール・クロウ・リルアラ。

以外に一途なようだった。きっと、彼がくどけば、

OKする娘だっているだろうに。

「スピカさん、水は駄目です!!」

死んじゃいますよお!!」

「じゃあ、火で行く」

「火も駄目です!! 彼は人間ですから!!」

「じゃあ、あいつを追いつ出して、アルト」

「苦手なんですけどね、あの人」

アルトはしぶしぶながら彼に近づいた。

前回ボコボコされた記憶は、少年の中ではまだ記憶に新しい。

大丈夫、とスピカはにっこりと笑った。

「君に何かあったら、今度こそ殺っちゃうから」

「殺しちゃ駄目ですってば!!」

完全に無視された男が、二人の気付かないところで死にかけていた。もう声さえも聞こえなかった。

「スピカさん!! あの人、死にかけてますっ!!」

「殺した方が私のため、君のため」

「スピカさん!! そんなに迷惑だったんですか!？」

パチン、とスピカが指を鳴らした。水が引いていき、

エトワールが解放される。げげほ、と彼が水を吐いた。

「これにこりたら、家に帰れ、エトワール」

「スピカ。素直になれ!! この嫌がらせさえも君の愛のかたー」

「うるさいうるさいうるさい。とつとと帰れ!!」

げしげしとエトワールを蹴りつけるスピカ。

が、エトワールは素直になれ、と言い続けていた。

とんでもなくポジティブシンキングな奴である。

アルトは思わず彼に同情した。

「バカ様。リルアラ家の大バカさま」

とその時だった。からかうような声とともに、背の高い男性が森にやってきたのだ。使用人のような服を着ているので、

おそらくは、エトワールの家に仕えているのだろう。

「イリアス!! バカ様はやめてくれない! 若様だろ!？」

「うるさいです、バカ様」

「だから、バカ様じゃねえっつの、クビにするぞお前」

「残念ですが、バカ様。俺が仕えてるのは旦那様ですので。

あ、バカだから分かんないか」

「ふざけんな、このやるお!!」

「はあっ!!」

がすつとイリアスと呼ばれた男が、彼の鳩尾にこぶしを叩きつけた。

倒れ掛かってきたのを受け止め、ものすごい笑顔でもう一度殴っている。

「え、ちょっ！ 何してんですか!？」

「バカの口を封じました」

「一応主の息子ですよね!？」

「あー、大丈夫です。俺ら幼馴染なんで。……

うちのバカ様がお世話かけました」

「こいつ迷惑だから殺していい?」

「あー。駄目ですよ。こいつ、殺しても死なないんで。悪運だけは強いんですよ。食事に毒盛つても、誰かがこぼしたり、やつがたまたま食べなかつたりしますしね」

「殺意あり!? 何があつたんですか、あなたたちの間に!？」

「…… なにもないですよ?」

「今の間はなんなんですか!！」

怖い会話を続ける彼らに、半泣きになったアルトが割り込んだ。

「イリアスさんっていいましたね!! 早くこの人連れてってください!! スピカさんが殺す前に!!」

「また来ますので、さよ～なら」

もう二度と来ないで。アルトは心からそう思った。

彼らが帰った後、アルトはいつものように彼女の食事を作った。

今日のメニューは、ガトーショコラとハーブティーだった。

ハーブティーの方は、庭に咲いていたハーブを使った、

とてもおいしいものだった。

「スピカさん」

「何?」

ケーキを食べながら、スピカはアルトに目を移した。

「お願いがあるんですけど」

どこかあどけなさを感じる顔で、スピカは首をかしげた。

アルトのお願いとは、スピカの仕事の見学をすることだった。一度、見てみたいというのだ。

スピカは一瞬迷ったが、邪魔をしないなら、といいおいて頷いた。研究室として使っているところに、

アルトを招き入れる。そこは奇妙な匂いがした。

定期的に掃除はしているのか、あまり汚れてはいない。

フラスコとビーカーが、いろいろな大きさでたくさんあり、どれにもさまざまな色の液体が満たしてあった。

匂いの正体はこれなのだろう。

いろいろな色の水晶が、きらきらときらめいてきれいだった。

スピカは一言もなく、研究を開始した。

水色の液体を赤い液体に混ぜ、さらに緑の液体に入れる。

ぼわん、と黒い気体が漂い始めた。

なんだかこげくさい。

「アルト、ふせて！」

「え、ええええええ！？」

スピカに突き飛ばされ、倒れこむと、先ほどのビーカーが破裂し、轟音とともに壁が壊された。

彼女は慌ててそれを壁に叩きつけたのだ。

「だ、大丈夫、です、か？」

「大丈夫。直すから……我の召喚に応えよ！！」

古よりの盟約により、出でよ、アルテミス！！^{いにしえ}」

弓を構えた、男装の美しい少女がその場に現れた。

スピカはさらに言う。

「この場を元の姿に！！」

パアツと純白の光が飛び散った。壊れた壁が、しだいに直っていく。

が、それが完全に直って少女が消えてしまうと、スピカはいきなり倒れた。ドサツと鈍い音が響く。

「スピカ、さん……？」

アルトはスピカを抱き上げた。体がひどく冷たい。アルトは焦った。

顔が青ざめていて、いつもよりスピカの肌は白かった。

「スピカさん!!」

アルトはスピカを揺さぶった。返事はない。目も開かない。

「どうしよう……おちつけ、おちつけ、とりあえず、ベッドに寝かせて、おちつけ……」

アルトは自分に言い聞かせると、迅速に行動した。

スピカを私室に運び込み、しばらく使われた形跡のないベッドに寝かせる。急いで村と城へ行き、リイラ「コルラッジと、レティーシャ・エルト・モランを呼びに行った。

二人はスピカを見て泣きそうになったが、懸命に魔法書を調べ上げ、解決方法を見つけてくれた。

その方法とは、使い魔が、主に力を分けるということだった。契約する際、少し魔女の魔力が使い魔にも分け与えられているらしい。

手をかざすと、少しずつスピカの顔に精気が戻ってきた。

半日以上そうしていると、ようやくスピカが目を開けた。

「バカバカバカ!! 心配したのよ!!」

リイラは泣きながらスピカに抱きついた。

「わあーん、バカバカあ!!」

レティも同じように抱きつく。スピカは罰が悪そうに、うつむいていた。

アルトもせいっぱいの怖い顔をしている。

「心臓に悪いですから、気をつけてくださいね!!」

「仲直りする前に、死んじゃったらどうしようって思ったじゃないの!!」

アルトがいなかったら、本当に死んじゃったかもしれないのよ!!」

「ごめん……三人とも」

スピカは二度と魔力をつかいはたすな、と二時間にわたってリイラに説教された。

だが、その代わり、彼女と仲直りすることができたのだった。

レティは勉強があるからと帰ったが、リイラは心配だからと次の仕事にもついてきた。

次の仕事は、場末の酒場の客引きとして、酒を飲むことだった。この国では、未成年禁酒法がないのだ。

アルトは一杯で目を回したけれど、スピカとリイラがすごかった。飲むは飲むは。強い酒や甘い酒、そんなに強くない酒までゆうに、かなり巨大なジョッキで二十杯は飲んでいた。

アルトはもう気持ち悪そうだった。

「よく、そんなに飲めますね」

「もつと飲めるよ」

「まだ足りないわねえ」

「ええええええええ！！」

「もう一軒行きましょうか？」

「もうかんべんしてくださいよ!」

アルトが半泣きになったが、二人は構わず別の店に行つてしまい、アルトは匂いだけで酔つて吐きそうになり、少し休むことになった。

そして次の仕事に向かうとした、その時だった。

「スピカあああああ！」

バカ様ことエトワール登場。

「こんなところで会うなんて、俺達うんめー」「スピカールン、死ねっ!!」「い、ぎゃああ!!」「

何か言いかけたが、スピカへの復讐者の少女が飛び出して来て、鳩尾を蹴り飛ばしていった。

「ディオナ」コーラルの名において、絶対にお前を殺してやる！！
兄、レヴァンの敵！！」

ここでやっと少女の名が明かされた。ディオナは小刀を構え、スピカに向かってきた。スピカはよけない。

今にも泣きそうに、紅い目がゆがんだ。

ドスツという鈍い音が響いた。少女の小刀が、スピカの腕に突き刺さったのだ。彼女の手が微かに震えた。

スピカが小刀を引き抜き、血が溢れる。

「よくも！！」

アルトがディオナに殴りかかった。ディオナは動かない。

否、動けないのだろ。敵という大義名分で刺したが、
彼女は人やいきものを害したことがないのだ。

アルトに突き飛ばされるように、彼女はへたり込んだ。

「よくも！！ スピカさんを！！」

アルトは本気で怒っていた。ディオナを殴りつけ、彼女の体は宙を舞った。そのまま受け身を取れず、背中を打ちつける。
さらにアルトは殴ろうとした。

少女は抵抗ができず、目を閉じることもできない。

「アルト、やめなさい。私は大丈夫だから」

アルトは命令を無視しようとした。が、主の言葉の強制力で、
動けなくなる。

「あ、あたし……あたし……」

動揺したように少女が呟いた。スピカが彼女に近づく。

「もう、終わりにしないか？ 私が言うべきではないのかも
しれないけれど、復讐は復讐しか生まない。私が死んだら、
アルトたちがあなたを殺すかもしれない」

「あんたに、あんたに何がわかるのよ！！ 私の苦しむも！！」

悲しみも知らないじゃないか！！」

「うん、知らない。けど、知ろうとすることはできる」

ディオナの目が大きく見開かれた。一瞬、その目が迷った。

だが、後ろの二人の姿を見て、彼女は迷いを捨てた。
否、捨てようとした。

彼女には仲間がいる。でも、自分には誰もいない。
その事実が少女の怒りに火をつけた。

「絶対に、絶対に、あんたのこと、あたし、許さないんだから！！
次は本当に殺してやるからッ！！」

ディオナは走り去ってしまい、スピカはうつむいていた。

その後、三人は薬を届けてからすぐに帰ることとなった。
リイラと別れ、館へと戻る。

お風呂をすませると、スピカは寝ると言いだした。

「まだ暗くなってませんよ？」

「いい。寝る」

「食事はどうします？」

「いない」

スピカの部屋から出て、アルトは家事をするために歩きだした。

スピカが館へと帰ったその頃、ディオナは、スピカがいるのとは
別の森で、古い小屋に帰っていた。

「あたし、どうしたらいいの。教えて、兄さん。

レヴァン兄さん。兄さん！！」

寄る辺のない少女は、ただ一人、すすり泣くのであった。

唯一の肉親だった、兄の名を呟きながら。

少女だってわかっていた。敵である魔女を殺しても、兄がもう二
度と

戻って来ないということ。だが、どうしても恨みは消えなかった。
悲しむも。痛みも。ぶつける相手は、魔女しかいなかったのだ。

魔女が後悔をしているとしても。もうもどることはできなかった。

スピカは夢を見ていた。殺した人間が、彼女を逆に殺そうとするという、悪夢だ。夢の中で、彼女は引き裂かれ、突き刺され、火をつけられ、

命乞いをしてもしそれは許されなかった。

全ては、彼女が殺した者たちにやったことだった。

繰り返される殺戮。死ぬことさえも許されない。

たすけて、と彼女は呟いた。もうゆるして、と。

それでもそれは止まることなく続く。

その時だった。

？スピカさん、大丈夫ですか！！ スピカさん！！？

声ともに、空中から白い手が伸びてきたのだ。

スピカはその手を取った。と同時に、目を覚ました。

気づくと、アルトが手をにぎっていてくれた。

「アルト……」

「どうかしましたか？」

「怖い夢をみたの」

「大丈夫ですよ。僕がついてますから」

「アルト、私、人を殺したの。依頼されるままに。

何人も。むしろのように」

アルトは一瞬驚いたような顔になったが、すぐに頷いた。

「そんな私でも、生きるケンリって、あるのかな。

私は、あの子になにをしてあげればいいんだろう」

「何も、しなくていいと思います。仮に、あったと

しても、それはあの子が考えるべきですから」

「そう……。アルト、こんな私でも、

一緒にいてくれる？ 最後まで……」

「もちろんですよ。話してくださって、ありがとうございます。

ございます。……もう、眠ったほうがいいですよ。

僕がずっと手をにぎってますから」

「ありがとうございます……」

やっと、スピカは安心したように眠った。

魔女は再び狙われる（後書き）

スピカがだんだん幼くなってきました。最初はもう少し大人っぽかったのに。

それに反比例し、アルトが大人っぽくなってきたので、この二人はこれで

いいのかなあとも思います

番外編　く使い魔が魔女に会った訳く

アルト「ハルメリアは、貧乏貴族の末っ子として生を受けた。三人兄弟の中でも、勉強は一番できて、そのせいでよくいじめられた。

親に言えばもっとひどいいじめが待っているのに、アルトには耐えるしかなかった。

アルトが逆らわないので、兄たちのいじめはだんだんエスカレートし、暗い物置に閉じ込められたり、家から追い出して鍵をかけ、入れないようにしたり、犬をけしかけてけがをさせようとしたこともあった。この時は、アルトが上手く逃げられたので、けがはしなかったけれど。

「おにいさまたち、なんでぼくをいじめるの？」

当時五歳だった幼いアルトが、泣きながら言うとき、

兄二人は意地悪そうに口元をゆがめ、お前が嫌い

だからだよ、と言いつ返した。

幼いなりに聡明だったアルトは、その一言でひどく傷ついた。そして、五年間にいたるまで一度も抵抗はしなかったし、両親にいいつけることはなかった。

が、十歳になりたての頃、アルトが兄たちに反抗するという事件がおこった。

アルトは兄たちにうとまれていたので、メイドたちもあまり彼に構う事がなかった。

会釈やあいさつはするが、それだけなのだ。

それでも、まったく話をしない者ばかりではなかった。まだ八歳のメイド見習いの少女だけは、アルトに仲良く

してくれたのだった。

名前はアネット。アネット＝ベル。

風変わりな少女らしく、他のメイドたちからはつまはじきにされているらしかった。

肌がやけに白すぎるせいからか、白い髪に紅い目という取り合わせからか、神秘的な印象がした。

紅い目はこの辺ではあまりない。

白い髪をポニーテールにした彼女は、いつも桃色の花の髪飾りをつけていて、とてもよく目立った。

アネットは無邪気で活発な娘だった。体が弱いのだが、そうは見えないほどに明るかった。

「あたしね、教会の娘なのよ」

つたない声で彼女はアルトに、いろいろなことを教えてくれた。

優しい姉のこと、厳格な父と母のこと。

姉の親友で、もう一人のお姉さんのように接してくれる少女のこと。

「この髪飾り。お姉ちゃんのおともだちがくれたんだよ。

東方の国のおはなんだって。たしか、モモっていうの。かわいいでしょ」

「うん、かわいいね。アネットに良く似合ってるよ」

「ありがとう、アルト」

アルトは友達ができてうれしかった。初めての、友達だった。

彼女のしゃべり方は、情感たっぷりで、とても楽しそうに話すので、アルトもつられて笑顔になってしまっていた。

「アナマリアお姉ちゃんね、とっても頭がいいの。あたしに、いろいろなことおしえてくれたんだよ。まどうしょのこととか、つかいまのこととかね。お母さんたちにはないしよねって言ってたけど。お母さんたち、そういうの嫌いなんだって」

「へえ、そうなんだ」

アルトはこういうとき相槌を打つことしかできない。

元々、人と話すのは得意ではないのだ。

あまりいいことは言えないアルトに、アネットはつまらない、と投げ出すことをしなかった。

無邪気な声で、いろいろなことを毎日話した。

だが、幸せは長くは続かなかった。

兄たちは、メイドたちからアネットについての報告を受け、彼女に嫌がらせを始めたのだ。アネットの病気に効く薬を隠したり、わざとぶつかったり転ばしたり、拳句の果てには、アネットに薬を売らぬよう、街の薬屋全部に圧力をかけたのだった。アネットはだんだん体を悪くしていき、咳を繰り返すようになっていった。

アルトには知られないように、空元気でも笑顔を通したので、アルトは全く気付かなかった。

兄たちは、アルトに近づくのをやめないアネットに、しだいにいらだちを募らせていった。直接アルトに会うな、と言いにも言ったが、この時ばかりは、彼女は強い感情をむき出しにした。

「あなたたちなんかに、あたしはしたがったりしない！！」

まちがってるのは、あなたたちのほう！！

アルトは、ちつともわるくなんかない！！」

まだ小さい子に真実をつかれた兄たちは、カッとなって

彼女を倉庫に押し込めた。誰もほとんど立ち入らない場所だった。

けほけほ、と苦しそうな咳が響く。アネットの紅い目には涙がにじんでいたが、兄たちはただ笑うだけだった。

アルトに近づかなきゃ出してやる、と言った。

アネットは首を振った。

「あなたたちなんかだいきらい！！ アルトはしあわせにならなきゃいけないの。」

あんないい子なんだもの。あたしなんかと、なかよくしてくれたんだもの!!」

咳まじりの声でアネットは叫んだ。顔がひどく青い。

彼女はもはや、気力だけで立ってしゃべっていた。

アネットが熱が出て、くらりとなった、その時だった。

「何をしているんですか、あなた方!!」

響いたのはアルトの声だった。気絶したアネットを抱きとめ、アルトは敢然と兄たちに立ち向かい、彼らを打ち負かした。

アルトを恐れたからか、単に罰が悪かったからか、この日から、兄たちの

いじめはなくなった。が、アネットもいなくなるようになった。

メイド見習いを、自らやめた、というのだ。

「あたし、お家にかえらなきゃならないの。これ、読んでね」

彼女は薄桃色の封筒をアルトにくれた。その真ん中には、モモの髪飾り

を模した印章が押してあった。

「どうしても行ってしまうの？」

「うん……」

最後くらいは、家族のもとで死にたいから。その言葉を、アネットが

口にすることはなかった。言ったら、死ぬのが怖くなりそうで。

アネットは自分の死期を悟っていた。あの後、薬を長い事飲んでいなかった

ので、すぐに飲んでも、体は少しもよくなかったのだ。

「いっしゅうかんだよ。いっしゅうかんしたら読んでね」

そう言い残し、アネットは汽車に乗って行ってしまった。

一週間後。手紙を開けたアルトは、文面を見てギョツとなった。手紙には、こう書かれていたのだ。

アルトがこのてがみをひらくころ、あたしはもうこのよにはいないの。ごめんね、アルト。あたし、いっしゅうかんごにしぬのがわかってたの。でも、アルトにはいえなかった。いうのがこわかったの。しなないで、つていわれることがこわかったの。だって、しぬことは、もうかえられないから。

あたしね、ほんとうはいえでだったの。ほんでよんで、メイドをやってみたくてね、おかあさんたちにだめだつていわれちゃってね、いえをでたの。どうしてもやりたかったから。

アルト、アルトも、じぶんにしようじきにいきなきゃだめだよ。やりたいことがあったら、いえをでたつてやりとげなきゃだめだよ。あたしはもういないけど、ずっと、空の高いところでアルトをみまもってるから。さようなら。

アネット＝ベル

アルトは泣きながら手紙を読んでいた。そして、両親と兄弟に自分のやりたいことを伝えた。

アルトはどこかへ奉公したかったのだ。

家事はすこしずつ練習していたし、料理の腕も悪くはなかった。

だが、貴族だということを重んじていた両親は、アルトの言葉をはねのけた。アルトはもう一度アネットの手紙を読み、手紙と身の回りの物とお金を少しだけ持って、家を出た。

アネットと同じように汽車に乗り、旅に出た。

その選択が正しかったのかは、その時はわからなかった。

アルトは寝過してしまい、お金を汽車ですべてつかいはたし、拳句の果てに、降りた街で人攫いにあつたのだから。

その後、アルトは五年間にわたり、オークション会場を転々とするようになった。上玉だからと、なかなか売られな

かったのだ。そして、ようやく売られることになった運命の日に、彼女と会ったのだった。

スピカールーンに会った時、アルトの心臓が跳ね上がった。初めて会ったのは、人身売買のオークションだった。

本当に、アネット＝ベルの髪の色と目に、彼女はとても良く似ていたのだ。そのことをのぞいても、とてもかわいらしい少女だった。

きれいな目で自分を見て、鈴のような声で名前を呼ばれ、アルトはそんな彼女に恋をした。

悪魔的というイメージを貫きたいらしいが、とても心やさしく、はかなげな少女に。

自分を買って助けてくれた、幼い女主人に。

アルトは今では、選択はまちがいではなかったとここから思えるのだった。

番外編 く使い魔が魔女に会った訳く（後書き）

アルトの幼いころの話です。キャラのことがよくわかるので、またたびたびこういうのは書きたいと思います。

魔女は恋心を自覚する

すべてののはじまりは、スピカールーンの一言だった。

「アルト、ケーキ買ってきて」

「はい！？」

朝起きて、白い髪を腰まで垂らした姿で、手紙のチェックをしていた彼女は、使い魔のアルト「ハルメリアに、唐突に言った。

「ケーキなら僕が作りますけど、

それじゃ駄目なんですか？」

「レティが、新しいケーキ屋が出来たって言ってたから、食べてみたいの」

「わかりました。家事を終えてから行ってきますね。いくつ買いますか？」

「全種類一個ずつお願い。自分の分も買っていていいから」

アルトは苦笑した。この少女は、小食なくせに、甘いものだけは人一倍食べるのだ。

アルトが洗濯し、掃除し、料理をしている間に、スピカは雪のような髪を結び、きらきらした星の髪飾りをつけていた。今日のローブは、桜色のかわいらしい色だった。

スピカは染色と裁縫が得意なので、

自分の服はすべて彼女の手作りだった。

「かわいいですね、その服。似合ってますよ」

「……！？」

スピカの星のようにきらめく紅い目が、大きく見開かれた。かわいらしい口が^オの形に開いている。

驚いた時の、彼女の癖だ。

耳が赤くなる前に、ぱっと彼女はアルトから目をそらしてしまっ

た。

「早く行つてきて」

「わかつてますよ、今行きます」

冷たく言われ、首をかしげながら、アルトは館を飛び出した。

「かわいいって。にあつてゐるって」

アルトが館から消えると、魔女は一人、赤くなりながら口元を緩ませた。

アルトは王都シュザリアで迷っていた。スピカから、地図をもらい忘れたのだ。

彼女から受け取った十カトル（銅貨）で馬車に乗り、やってきたのはいいが、

ケーキ屋の場所が分からなかった。

街の人に話しかけても、冷たい声で、今忙しいんだ、と返される。どうしようとおもった、その時だった。

「どうしたの、その子、迷った？」

黄色い髪を後ろでひとつに結った女性が、優しく話しかけてくれた。

同じ色の目が、好奇心にキラキラ輝いている。

「君さー。人形の魔女・スピカ＝ルーンの、使い魔でしょう？」

「な、なんで知っているんですか！？」

「君がいたオークションはねえ、知らぬものはいないとされるくらい、

有名なんだよ。落札品とかも新聞に載るしね」

「だから、みんな僕をさけるんですか？」

「それもあると思うよ。スピカ＝ルーンは恐れられているからね」
キツとアルトは女性を睨みつけた。

にこにこ笑っている彼女の考えていることが読めない。

「あなたも、ですか？」

「冗談でしょう？　なら君に話しかける訳ないじゃないの。」

私は、殺しを依頼したくせに、後から手のひらを裏返すようなバカは嫌いだからね。スピカールーンを恐れてなんかいないよ。ほっとしたように、アルトは息をついた。

「何か探してるの、君？」

「アルト」ハルメリアです。君君言うのやめてください」

「アルトね。私はメリッサウオーカー。『占いカフェ

・カッサンドラ』って知ってる？　その店主」

「カッサンドラの！？　僕が探してるの、そこですよ！！」

偶然だね、とメリッサが笑う。アルトは運よく、探していた店の店主にめぐりあったのだった。

メリッサウオーカーは、既婚者だった。

白い指の薬指に、結婚指輪がはめられている。

銀色のリングには、ラピスラズリが飾られていて、ひいらぎの模様が彫ってあった。

「結婚、してるんですね」

「そ。人妻だよ。彼は細工師でね、この指輪も彼が作ってくれたんだよ。きれいでしょ？」

「旦那さんが作ってくれたんですか、いいですね」

「うん……あ、ついたよ」

一瞬悲しそうな目になったが、つぎの瞬間にはもうメリッサは笑顔に戻っていた。

『占いカフェ・カッサンドラ』は、エキゾチックな雰囲気だった。ふしぎな文様のタペストリーが飾られ、きれいなカードや水晶が置いてある。

「で、ご注文は？」

「えーと、全種類一個ずつください」

「一個１００カトルだから、２０００カトルだねえ」

「えーと、あと、もうひとつください。このチョコのやつ」
「まいどあり」

2000と1000カトル払い、アルトはケーキを受け取った。
一礼して店を出ようとすると、ちよつと待って、と呼ばいとめられた。

「占ってあげるから待ってよ。そこ、座って」

アルトはメリッサの前の椅子に座った。

真剣な顔をした彼女が、タロットと呼んだカードを慎重に切っていく。

スプレッドはヘキサグラムにするね、とメリッサは言った。

七枚のカードを星の形に並べていく。

「最初は過去、力の正位置。勇氣、危険を伴う判断、独立心。君さ、もしかして家出した？」

「えっ！？　なんでわかつたんですか？」

アルトは出されたミルクティーでせきこんだ。

「なんとなく結果で占っただけだよ。次は現在、世界の正位置。ふうん、君の目的は達成されたね」

「はい、当たってます！！」

「次は未来、運命の輪の正位置。幸運の始まり、良い方向への進展。君の未来は明るいよ。次は対応、恋人の正位置。愛の強さ、直感を信じる。」

うーん、愛を疑うなっでことかな」

かあつとアルトが赤面した。ガシャン、とお茶をこぼしてしまう。

それには構わず、メリッサは続けた。

「次は環境、つと。審判の逆位置。不満、見当違い。」

君は今の状況に満足してないね。当たってる？」

「……当たってます」

アルトはテーブルを拭く手を止め、うつむいた。

「次は願望だね。星の正位置。明るい未来。恋愛の成就。好きな人と結ばれたいんだねえ」

椅子にすわろうとした彼は、がしゃんと動揺のあまり、すっ転んだ。

椅子が倒れ、膝をすりむく。

笑いたいのをこらえ、メリッサは真剣な顔を通していた。

「最終予想。これで最後だよ。死神の逆位置」

「し、死神!？」

アルトがさつとあおざめた。

「大丈夫。逆だから意味も逆だよ。好転する、変化。……これから顧みるに、愛を疑わなければ、君の目的は果たされると思うよ。おつかれさま」

「ありがとうございます」

「いつでも占うからまたおいでね」

アルトはメリッサに頭を下げ、嬉しそうな様子で帰って行った。

「お帰り、アルト!!」

館に帰ると、スピカが飛び出してきた。思わずケーキの入った箱を落としそうになり、彼は慌てて持ち直す。

「今帰りました、スピカさん。これ、ケーキです」

早速スピカは箱を開けた。

ショートケーキ、ガトーショコラにモンブラン、エクレア、シュークリーム、ティラミス、スモモのタルト、ブラウニー、ミルフィーユ、トルテ、スフレ、チーズケーキ、プリン、スコーン、マカロン、マフィン、アップルパイ、シャルロット、コケモモのタルト、キイチゴパイ

などが、次々にかわいらしい口に消えていくのは、圧巻だった。

アルトは粉砂糖をたっぷりかけたガトーショコラの前で、動きを止めている。

「アルト、お茶淹れて」

スピカがそういう頃には、ミルフィーユにさしかかったところだ

った。

かなり食べるのが早い。味がわかっていのか、と聞きたいくらいだ。

が、スピカの目はきらきらときらめいており、頬も紅潮していたから、

かなりおいしいのは確かだった。

ハーブティーを淹れ、二人分にカップに注ぎ終えたアルトは、自分の

ケーキを一口食べてみた。

「お、おいしい……」

アルトは落ち込んだ。かなり落ち込んだ。何故って、自分の作るものより、

はるかにおいしいのだから（店出してるから当たり前）。

あの人に弟子入りしよう！！ アルトはそう決意した。

すべてはスピカのために。愛する彼女のためだった。

次の日、スピカは買い物に行くから一緒に来ないか、と聞いてきたが、

アルトは行くところがあるからと断った。

スピカが悲しそうな目をしたことに、彼は一切気付かなかった。

アルトはすぐに馬車に乗り、昨日のカフェにやってきた。

「メリッサさん！！」

「えーと、君は昨日の……」

「アルトです！！ 僕を弟子にしてください！！」

「ダメ」

「だ、駄目なんですか！？」

「私は弟子は取らないの。……でも、君が通って、勝手に私の技を盗むのは止めないけどね」

「ありがとうございます！！」

それから、アルトは足しげくここに通った。スピカの誘いは、幾度となく断られた。アルトとしても辛かったが、彼女の喜ぶ顔を見たいという一心で耐えた。

スピカは苛立ちをつのらせていた。アルトが、少し前はどこにでもついてきていたアルトが、ここ最近、毎日出かけるからと、誘いを断り続けるからだ。

王都シュザリアの市場で、「凶悪悪魔君人形（限定品・1500カトル）」を購入し、カフェによううと立ち寄った彼女は、そこに使い魔の姿を見つけた。

「アル……」

声をかけようとした彼女は、そこで立ち止まった。

アルトが、自分以外の（レティ・リイラをのぞく）女性と、楽しく話している。

女性が何事か言い、アルトが赤くなった。

泣きそうになり、スピカはぬいぐるみを抱いたまま、館に逃げ帰った。

アルトの名誉のために言っておくと、彼はもちろん、メリッサが好きでは

なかった。好きは好きだが、愛してはいない。既婚者だし。あくまで友人として好きなのだ。

赤くなっただって、彼女に、「告白しちやえば？」 「や、やめてくださいよ、いきなり言つのー！」 とからかわれたからだったりする。

スピカは全然知らないし、ついでに言えば、薬指の結婚指輪にも彼女は
気づいてなかった。

「リイラ、私、病気なのかな」

遊びに来たリイラ「コルラッジに、スピカはすっかり気落ちした様子で言った。

「病気！？ 何があつたの！？」

「なんかへんなの。アルトに褒められると赤くなるし、アルトが誰かと楽しく話していると、悲しくなるの」

「それ、病気じゃないわよ。恋よ恋」

「恋……？」

子供のようにスピカが小首をかしげる。

頬を桃色に染めると、これが恋、と

呟き、まだずきずきと痛む胸に手をあてた。

魔女は恋心を自覚する（後書き）

やっとスピカが自分の思いに気付きます。
少し遅いと思われるかもしれませんが、
幼い彼女の恋を見守ってあげてください。

魔女と使い魔は奔走する

スピカールンは、朝から大忙しだった。

珍しく、初めての家事をしていたのだ。

使い魔・アルトハルメリアがオロオロしている。

彼女の初めての試みは、大失敗だった。

皿を洗おうとすれば全て割り、洗濯をすれば破くか、

干すときにすっ転ぶ。料理をすれば手を切る、もしくは

（何故か）爆発を起こす。掃除をすれば逆に

散らかすといった感じで、ついにアルトに、低い声で

何もしないでください、と叱られた。

スピカが何故家事をしようとしたのかというと、自分の

アルトへの思いを自覚したからだった。

アルトが他の女性と仲良くしているのを見てしまい、

どこかへ行ってしまふのでは？と恐怖したのだ。

彼のために何かしたいと思い、早速やったのだが、空回りしていた。

アルトは首をかしげながら、皿の破片を片づけ、洗濯をやり直し、台所をぴかぴかに磨き上げていた。アルトは訳がわからなかった。

今まで何もしようとしなかった女主人が、いきなり私が家事をする、と言ってきたのだ。全て失敗していたので、心配になり、何もしないで

、と叱りつけてしまったが。

彼女がけがをしているのを見るのが、とても嫌だった。悲しかった。彼女に知ってほしいと思った。自分の気持ちを。自分が、どれだけ彼女のことを想っているかを。

『告白しちゃったら？』

友人であるメリッサウォーカーの言葉がよみがえり、アルトは

赤くなった。でも、今は言えない。言って、普通の顔で君を私も好きだ、と言われたくなかった。使い魔としての愛情なんて、アルトは求めていなかった。一人の男としてみてくれないのであれば、愛なんていらなかった。

「スピカ………」

初めてさんをつけずに呼んでみる。少し赤くなっていると、ドサツと何かが倒れる音が聞こえてきた。

「スピカさん!!」

アルトが駆け付けると、スピカは顔を真っ赤にして倒れていた。目がぐるぐると回っている。額に手をあてると、やけどしそうなほどの熱が手に伝わってきた。

「アルト………あつい………なんで………?」

「だ、大丈夫ですか!? 立てますか!?」

アルトはかなり軽い彼女を抱き上げ、ベッドまで運んだ。

「ちよつと待っててくださいね、すぐに戻りますから」

「いけないで」

ぐいつとスピカがアルトの服の裾を引っ張った。おもいがけず強い力に、彼はつんのめった。

「どこにもいかないで」

「わがまま言わないでくださいよ、氷とか薬とか買ってきますから。」

リイラさんにも連絡しないと………」

「リイラ………今日………出張中………仕事………

いない………」

「うっ、うそおおおっ!!」

アルトはつい絶叫してしまった。リイラ「コルラツジは、スピカの親友である。しっかりした女性で頼りになるのだが、それがいない

なんて。

ぐいつと引つ張られ、アルトはスピカのベッドの上に倒れこんだ。

「いたたた。スピカさん、なにするんですか!!」

「とおくにいけないで。わたしのそばからはなれないで」

アルトは目を見開いた。唇にやわらかい感触が伝わってくる。

スピカの唇が、アルトの唇に重なっていた。

「ずっと……わたし……そばに……」

それだけ言っと、スピカはかわいらしい寝息を立てて眠ってしまった。

真つ赤になりながら、アルトは首をかしげる。

元々鋭いたちではないので、彼女の思いには気づかなかった。

アルトはスピカの財布から少しお金を持ちだし、馬車に乗って

王都シュザリアにやってきた。

歩き回っていると、友人のメリッサと会った。

「アルト、今日も面白い物？」

「メリッサさん!! スピカさんが風邪になったみたいなんです。薬とか、売ってるお店しりませんか？」

「家によっていけるなら、薬くらいわかるよ。氷もたくさんあるしね」

につこりと笑った彼女は、仕入れ中らしく、果物や卵の入った袋を持っていた。小麦粉の大袋を、後で届けてくれるように、店の人に頼んでいる。

彼女は『占いカフェ・カッサンドラ』の店主なのだった。

「ありがとうございます!!」

アルトは持ちます、とメリッサの荷物を取り上げた。

店に着くと、メリッサはすぐに薬を取ってきてくれた。袋に入った

いくつかの氷も渡してくれる。

「これ、アイスの作り方ね。食欲なくても、冷たいアイスなら食べれるかもしれないから」

「ありがとうございます、助かりました!!」

「いいよう。人形の魔女によるしくね」

「はいっ!!」

アルトは再び馬車に乗り、館へ戻っていった。

目覚めたスピカが、ぎゅうっと抱きついて来て、顔が赤くなる。

「どこにもいかないでついていった……」

「ご、ごめんなさい。薬とかを買いに行っていたんです。……

・あっ!! 体温計がないっ!!」

買い忘れた、と悲観したが、薬が入った袋に一緒に入っていた。

メリッサに感謝し、スピカに渡す。

「熱、はかってください」

「やかたわからない」

アルトは泣きなくなった。男としてみられていないのかな、とシヨツク

を受けた。嘆いていても仕方ないので、目を閉じてスピカのわきの下に

体温計をはさむ。あつと声が上がったので、思わず目を開いてしまった。

そして、後悔した。見てしまった。女の子の裸を。

「あつい……これ、いらない……」

「こんなところで脱がないでくださいっ!!」

いきなりスピカがローブを脱ぎ捨てたのだ。どこまでも平坦な体の造り。

少年のような体の線。白すぎるほどの肌。細すぎる体。

かあつと紅くなり、慌てて目をそらしたアルトは、スピカに新しいローブを着せかけた。薄い青色をしていて、一番薄い素材だった。

「すずしくなった」

「何か、食べれますか？」

「いらない」

メリッサのメモを思い出し、アルトは少し彼女のそばを離れた。

アイスクリームの造り方は、思ったより簡単だった。

氷やいろいろなものを入れ、くるくるとまわしていく。

冷たいアイスは、甘くておいしかった。とりりと口の中でとける。

アルトには、初めて食べるものだった。これなら彼女も食べられるかもしれない。しばらく冷やして、一番良く出来た、チョコレート味のスピカのところへ持っていった。

ついでに、枕を氷枕に変える。

スピカの紅い目がきらきらと瞬いた。またた

銀色のスプーンで、ガラスの入れ物に入ったアイスをすくいあげる。

「おいしい……。あまい……。」

さつきよりスピカの顔色はよかった。こころなしか、顔もあかくな
いような

「……？　と思う前に、アルトはバタンツと倒れた。

ずっと看病していたせい、スピカに口づけされたせい、風邪を
うつされたようだ。

「アルトッ!？」

正気に返ったスピカが叫ぶ。そのまま、アルトはスピカと入れ替わ
りに、

ベッドの住人になってしまったのだった。

仕事を終えて帰ってきたリイラとともに、スピカの看病を受け、ア
ルトは

ぐるぐると目を回していた。

おつかれさま、と事情を聞いたリイラが言った言葉は、スピカの泣
き声

でかきけされたのだった。

魔女と使い魔は奔走する（後書き）

ほとんど使い魔のアルトが頑張るお話です。スピカも頑張りますが。次は番外編のスピカのお話を書く予定です。

番外編　く魔女になった訳く

スピカールーンの本名は、アナマリア＝ベルと
いった。彼女はこの名前を一度捨てている。
これは彼女が、魔女となる前の物語である。

アナマリアはかわいらしかったが、大人しく内気
な娘だった。天真爛漫てんしんらんまんな愛くるしい妹・アネットと、
厳格な、教会に住む両親と暮らしていた。

火と水のように違う姉妹たちは、とても仲がよかった。

村人たちも、両親もこの姉妹を愛した。特に仲がよかったのが、
リイラ＝コルラッジだった。彼女はとても優しく、お気に入りお気に入りの装
飾品を

おしげもなく二人にくれた。モモという花の髪飾りと、きらきらと
輝く

星の髪飾りだった。

アナマリアの好みは、人並み外れていたが、これだけは毎日つけて
いた。

真っ白い雪のような二人の髪に、それはとても良く映えていた。

楽しい毎日が続いたが、それは彼女が十歳になるころにそれは終わ
った。

幼い妹が、八歳で体の弱いアネットが、奉公に出ると言い始めたの
だ。

両親は猛反対した。リイラとアナマリアも、あまり良い顔はしなか
った。

けれど、彼女はすっかり決意していたらしい。

一度はあきらめた振りをし、家を飛び出した。

そして、すっかり体を悪くして戻ってきた。

奉公先で何かがあったらしい。

死ぬ間際、彼女はアナマリアに一言を残した。

「おねえちゃん、おかあさんたちに、えんりよばつかしてちゃダメだよ。」

ちゃんとじぶんにしようじきに、いきてね」

この言葉が、アナマリアの運命を変えた。

彼女がそう言わなければ、アナマリアは魔女になどなっていなかっただろう。

そのまま村で教会の仕事を継いでいたはずだった。

彼女が魔女になる決意をしたのは、リイラがアナマリアの家から、紫色の地に、ダビデの星《ヘキサグラム》が書いてある魔導書を持ちだして来てからだだった。アナマリアは青ざめて止めたが、リイラは冗談半分で、悪魔を召喚してしまったのだ。その召喚に必要なだったのは、資質ではなく、汚れなき血だったのだ。だが、資質がなければ契約はできない。リイラには資質は欠片もなく、

アナマリアには資質があった。

怒り狂ってリイラに飛びかかる前に、アナマリアは悪魔の前に飛び出した。

「あたしが契約するわ！！ だから、リイラに手を出さないで！

」

「うまそうな血の娘だ。もちろんお前でも構わない。契約の対価は、

お前の一番大切なものだ。いいな」

「いいわ」

「アナマリア、だめっ！！」

リイラが叫んだ。

「責任ならあたしが取る！！ 死んででも取るから、あんたは契約

なんてしちゃだめよっ!!」

アナマリアは振り向き、黙って首を振った。悲しげな目だった。

「アナマリア!! ベルは、悪魔・サテリアルと契約をします」

「いいだろう、ケケケケケ」

彼女に対する対価は、? 両親の愛? だった。

その時は、彼女には、何を取られたのかわからなかったけれど。

悲劇は、両親が家に帰って来てからおこった。

「おかえりなさい!!」

いつものように出迎えた娘に、両親は汚らしいものでも見るかのような目を向けた。びくつ、とアナマリアが立ち止る。

「お父様!? お母様!」

「誰がお前の両親だつて? ふざけるんじゃないよ、この化け物が!!」

「死んでしまえ!! 化け物!!」

たとえ、アナマリアが、禁忌である契約を行ったのだとしても、? 愛? があつたのなら、両親は幼い娘を許したに違いなかった。私欲ではなく、大事な親友を救うためだったのだから。

両親は武器を手に、アナマリアに襲いかかった。

「あ……. あああああああつ!!」

アナマリアは咆哮ほうこうした。死にたくない。

怖い。恐怖の心が彼女を支配していた。

アナマリアは手にしたばかりの力で、本能が命じるままに

爪を変化させ、両親を切り裂いた。

血があふれ、一部は彼女の顔や服に飛んだ。

悲鳴が上がる。だが、アナマリアは止まらなかった。

何度も何度も、死に絶えるまで攻撃した。人間が、肉塊に

変わるまで。自分が力つきるまで。

リイラが家に駆け込んだ時、スピカは血の海で、倒れこんでいた。

両親の肉塊を胸に抱きながら。感情のない目でリイラを見つめていた。

アナマリアは、この日から、感情がないかのように、過ごしていた。依頼がくるままに、何人も人を殺した。

三人目は、レヴァン「コーラル」という名だった。

悪徳高利貸しで、妹が一人、いるらしい。

だが、アナマリアにはどうでもいいことだった。

「あなたがレヴァン「コーラル」？」

「あ？ なんだよ、お前」

「依頼人のために、あなたを殺す」

「俺を、殺すだと？ 冗談も休み休み……ぎゃあああつ

！！」

風刃で彼の腕が片方、落とされた。血があふれだして、小さな血だまりをつくる。

彼は恐怖で顔をひきつらせた。腰が抜けたらしく、ズルズルと体をひきずって後ずさるうとする。

「ひつ！！ く、来るな！！ 来るなあつ！！」

「殺す殺す殺す殺す」

「み、見逃してくれ、オレには妹がいるんだ！！ オレが死んだら、どんなに

ディオナが、あいつが悲しむことか……」

「だーめ。依頼人は、あなたを殺せといったから」

断末魔の悲鳴が響く中、少女はただ笑っていた。

それから、彼女は名も知らぬものたちを殺した。

殺しまくった。心は壊れたかのように、感情は消えていた。

そんな時、血にまみれた彼女に、声をかけてくれたものが、いた。

「ねえ、君、家に来ない？」

その女性は、とても美しかった。紅い目と金の目、右目と左目で色が違っていた。どちらも、見えていないらしいが。

「なぜ、私に声をかけたの？」

「きれいな魂があるなあって思ったから」

「私は人を殺したのに！！　きれいな訳がないっ」

「きれいだよ」。手は血に染まったかもしれないけど、心はちつとも汚れてない。あなた、私欲で人を殺したんじゃないでしょ？　何人殺しても、後で後悔したでしょ？」

アナマリアは、人を殺してから初めて泣いた。

女性の胸に飛び込んで、大声で泣いた。

女性は、アリアドネー・ヘカテ・ルーンと名乗った。

新しい名前を彼女にくれた。

「スピカールーン？」

「うん。きれいな星の名前だよ。一等星なの。」

君にぴったりだと思うよ」

それから、アナマリア改めスピカは、アリアドネー（略アリア）

のもとですごすことになった。彼女は、『盲目の魔女』と恐れられる強大な魔女だった。悪魔と契約した際、両目の視力を失ったらしい。

彼女はスピカにいろいろな魔法を教えてくれた。

でも、いつまでも弟子でいるわけにはいかない。

免許皆伝をもらったスピカは、師匠とともに一晩泣き明かした。

そして、彼女の元から旅立ち、森に館を構えた。

元はアナマリアールという名だった少女は、今はスピカールーンとして、生きているのだった。ちゃんと罪を背負って。

スピカは妹・アネットと、師匠であるアリアには、ずっと感謝しているのだった。

番外編　く魔女になった訳く（後書き）

彼女がスピカとして生きる前の物語です。次は本編に戻ります。

使い魔は魔女に反抗する

スピカールンは、困り果てていた。

朝から、いつも通りにすることができない。

使い魔・アルトハルメラアへの恋心を

自覚してから、なんとなく調子が悪かった。

彼の顔を見るだけで、顔が赤くなる。

彼の名前を呼ぶことが難しい。

つい使い魔と呼んでしまい、彼に怒鳴られた。

アルトの様子もおかしい、とスピカは思った。

以前は使い魔と呼んでも怒らなかつたのに、

今は涙目になって怒る。

かなりの大声で怒鳴りつける。

何故なのか、スピカにはわからなかつた。

アルトの思いを、彼女は欠片も知らないのだ。

アルトは今日はずっと館にいらしい。

館をピカピカに磨き上げ、洗濯をし、

作ってくれた食事はかなり量が多かつた。

はりきっているようだ。

スピカは無言で、ふわふわに焼きあげられたパンやら、

野菜と魚介類たっぷりのスープやら、ソースをかけた

鶏肉の焼き物やら、デザートチョコのアイスクリーム

をたいらげた。

作ったばかりの、黄色い地に、サクラの花の模様を

刺繍ししゅうしたローブを着て、いつものように白い髪を結う。

ローブに刺繍するのは初めてだった。

リイラに、少しはおしゃれをしたら？ 服に刺繍をするとかさ、

とか言われたからだ。

スピカは、アルトに似合うか、と聞いてみた。

アルトは赤くなって頷く。この動作を見ても、

鈍い彼女は気づかなかった。アルトも気づいていないので、
おあいこと言えばおあいこだが。

と、座っていたアルトが、いきなり立ち上がった。

小首をかしげるスピカの前に、歩いてくる。

少し近づくだけでも、彼女の顔は赤らんだ。

それには気づかず、アルトは自身も赤くなりながら
言った。

「スピカさん……いや、スピカ」

本人の前で初めて呼び捨てにしたので、スピカは
驚きで目を見開いていた。

「こういうの、初めてだから、つたないかもしれない
けど、ちゃんと聞いてね」

「……………」

ふわり、とアルトが優しく彼女を抱きよせた。

スピカはその瞬間、火の中に投げ込まれたかのような、
錯覚におちいった。顔から湯気が出ているかのように、
顔が真っ赤だった。

「僕は、スピカが好きだよ。今は、僕の事、男と
して見れないかもしれないけど、いつまでも待つから。
だから、僕とつきあってください……………」

いくら恋愛にうといスピカでも、この言葉の意味が
わからない訳ではない。

スピカは嬉しくなった。

アルトが、自分と同じ気持ちだった。

はい、と返事をしようとして、スピカはためらった。
恐怖が心の隅にわいてきたのだ。

このまま、アルトの気持ちを受け入れた時、
私はどうなるのだろう。

そう思うと、怖かった。

気がつくと、スピカはアルトを突き放し、
首を振っていた。

「なんで？ 僕を、男として見れないってこと！？」

僕は、あなたにとって使い魔でしかないんですか！？

ずっと！？ 一生！？」

「うん………」

スピカはアルトの顔が見られなかった。

言ってから、後悔したけれど、もう遅かった。

アルトはぐいっと彼女を引き寄せた。

あまりの力の強さに、スピカがきやつと悲鳴を

上げたが、構わなかった。

スピカの唇に、アルトの唇が重なった。

初めて彼からする口づけだった。

だが、彼女がした時とは違い、むさぼるような、
奪うような口づけだった。

長い口づけの後、アルトはスピカを突き放した。
彼の顔は、今にも泣きそうだった。

「頭を少し冷やします。しばらく帰りません」
くるりと身をひるがえしたアルトに、スピカは
さっと青ざめた。大声で叫ぶ。

「アルト！！ 待ってアルトッ！！」

アルトは振りかえらなかった。止まりもしなかった。
ボタン、と扉が閉まる音が響く。
床にぺたり、と座り込み、スピカは
すすり泣いた。ぼろぼろと、涙を流して
泣いた。言ったことは二度と取り消すことはできない。
そのことをおもいしつたスピカは、一晩中一人で
泣いていたのだった。

使い魔は魔女に反抗する（後書き）

アルトとスピカの恋愛が動き出します。いつまでもこのままではいけないので。

恋愛をあまり書いたことがないので、つたないですが、これからもよろしく願います。

使い魔は葛藤する（前書き）

告白し、振られてしまった使い魔、
アルト。彼は館を飛び出し、
ある場所へ行きついた……。。

使い魔は葛藤する

使い魔・アルト「ハルメリアは、身一つで友人のメリツサ「ウォーカー」のもとへやってきた。

彼女は、今にも泣きそうな顔で、

「しばらく泊めてください」

と言ってきたアルトに少し驚いたが、笑顔で了承した。

「何かあったの、アルト？」

「ふられました」

「は？」

「ふられたんです！！ スピカに！！」

どかつとアルトは音を立て、椅子に座った。

メリツサは砂糖入りの紅茶を出し、アルトの前に座った。

「ふられたってどういうこと？」

「そんなこと聞かないくださいよ！！」

僕は使い魔としか見られないんですって！！」

大声でわめいてすつきりしたのか、アルトはしばらくの間黙っていた。

メリツサは仕方なく、ケーキの仕込みを開始していた。アルトがやってきて、手伝い始める。いいから、と手で制止しようとしたが、何も考えたくないからと言われ、やらせてやった。こんなつらそうな目で言われたら、そうしてやらざるを得ないだろう。

「アルト、泣いたっていいんだよ？」

「え？」

「あんた、最近いつ泣いた？」

ぴたりとアルトが手を止めた。

しばし考え込む。ここ五年ほど、泣いていない。

「悲しい時は、泣いた方がいいと思うよ。」

お姉さんが胸を貸してあげるから、

思い切りお泣き」

「・・・・・・・・」

メリッサの顔は母性であふれていた。

弟妹か、ひよつとしたら

息子がいるのかもしれない。

アルトはメリッサに抱きしめられ、

久しぶりに大声で泣いた。

すっかり目を泣き腫らしたアルトは、

濡れタオルを目にあてていた。

メリッサは気遣わしげに目をやっている。

それでも、手はキーキづくりのために

動かされていた。くるくるとクリームの

入ったボウルをかき回している。

と、コンコンと外でノックの音がした。

「すみません、開店時間がすぎてるんですけれど。」

もしかして今日、お休みですか？」

「あ、はい、今開けます」

がたつ、とアルトが立ちあがった。青ざめている。

「どうしたの、アルト？」

「リイラさんだ・・・・・・・・」

「リイラ？」

「リイラ＝コルラッジ。スピカの親友です」

隠れてて。そう言い置いて、メリッサは戸を開けた。

アルトがそつ、と部屋を抜け出して隣の部屋に隠れる。

入ってきた少女は、アルトがここにいることなど、

まったく知らなかった。知る訳もない。

リイラはスピカの分のケーキ全種類と、自分とアルト用

にチョコレートケーキを二つ買いあげていった。

「よかったやっていて、私の友達が、ここのケーキ大好きなんです」

「光栄ですわ、ありがとうございます」

リイラに手を振られ、メリッサはニコニコしていたが、

すぐにアルトを呼びに行った。

「アルト、一度帰った方がいいんじゃないの？」

「嫌です」

「そんなにあの子と顔を合わせるのが嫌？」

アルトは悲しそうな顔で首を振った。

「そんなことはありません。振られたことを差し引いても、

彼女と会えないときみしいですから」

「じゃあ、なんで？」

「何をするかわからないから」

アルトはため息をつき、冷めきつた紅茶を一口飲んだ。

メリッサは新しく紅茶を淹れ直し、アルトの前に置く。

「僕、無理やりキスしちゃったんです、スピカに」

「え、アルトが？」

「頭に血が上っていて、どうすることもできなかった」

「……………」

「だから、怖いんです。また、彼女に狼藉ろうじせきを働いて
しまうような気がして」

アルトは手で顔を覆った。ぼろぼろと、手の隙間から涙のしずくが垂れ落ちていく。

メリッサは黙ってそれを聞いていたが、やがて口を開いた。

「その時、彼女は嫌がっていた？」

「え？」

「キスした時、彼女は抵抗した？」

「して、ないです、けど・・・」

「じゃあ、彼女はあんたが好きなんじゃないの？」

「僕の話聞いてました！？ 彼女は僕のこと使い魔としか見れないって言ったんです！！」

「彼女は怖かったのかもしれないよ。使い魔として

じゃない君と過ごすのが、怖かったのかも」

「やめてください！！ これ以上混乱させないでくださいよっ」

わめきたてると、アルトはメリッサが用意してくれた部屋に飛び込み、そこでまた泣いた。

彼は知らなかった。あの館で、魔女もまた、同じように

泣いていることに。ただ彼女のことを想い、ひたすらに

泣くばかりだった。

使い魔は葛藤する（後書き）

アルトの方のお話を書いてみました。
次はスピカです。スピカが決意しないと、
二人の恋は進展しませんから。

魔女は一人涙する

スピカ「ルーンは泣いていた。

一人で、使い魔少年、アルト「ハルメリアを想って泣いていた。

告白された彼女は、今までとは違う関係になるのが怖くて、彼をふってしまったのだ。都合がよすぎると思う。でも、どうしても怖かった。今は、心からあれは間違いだったと気づいているけれど。彼のことから好きなら、恐怖など感じてはいけなかったのだ。

「アルト……」

「スピカ！！ ケーキ買ってきたわよっ、一緒に食べよう？ と、あれ？ アルトは？」

親友のリイラ「コルラッジが館にやってきた。

スピカは彼女に抱きつき、力の限りに泣き叫んだ。

「落ち着いた？」

十分後、リイラにピンクの花模様のハンカチを差し出され、スピカは腫れあがった目で頷いた。

並べられた大量のケーキを次々と食べていく。

が、いつもよりペースはかなり遅かった。

「何があったのか、話してくれる？」

「ん……」

スピカは紅い目でしっかりとリイラを見つめ、口を開いた。その目はひどく悲しかった。

「アルトに、告白、されたの」

「え……」

リイラは目を見開いた。スピカがアルトを愛している
ということ、彼女は知っていた。

なのに、彼女の顔は悲しそうだった。

「OK、しなかったの……？」

スピカの手が止まった。カラン、と銀のフォークが
お皿の上で音を立てる。返事はなかったが、その態度
が、肯定を物語っていた。

「どうしよう、リイラ……私、アルトに、

使い魔としてしか見れないのか、って聞かれて、

うん、って言っちゃった……！」

「どうしてそんなこと言ったの……！」

「怖かったの、今までと違う関係ってというのが

すごく怖かった……」

黙ってリイラが立ちあがった。びくつ、とスピカが
身をすくめる。リイラは彼女の顔を覗き込んで言った。

「勇気を出さなきゃ、アルトとは結ばれないわよ」

「わかってる、わかってるけど……！」

「自分で考えなさい。私は協力できないわ。アルトと
恋人になるのか、そのままアルトを使い魔として接する

のか、選りなさい」

リイラの声は、いつもの優しいものとは違い、かなり厳しかった。
彼女が自分で考えなくては意味がない。

リイラは自分の主観をスピカに押し付けるつもりなどなかった。

「ただし、そのまま使い魔として彼に接するのならば、アルトを
解放してあげた方がいいわ。彼は、あんたを女性として愛して
いるのだから」

アルトが、いなくなる……。私の目の前から……。

頭から冷水を浴びせかけられたかのように、スピカの顔から
血の気が引いて行った。

紅い宝石のような目に、涙の粒がにじむ。

「じゃあ私、帰るわね」

リイラがそう言ったのにも、スピカには聞こえていないようだった。

すすり泣くような声が聞こえてきて、彼女は気遣わしげな目を向けた

が、何も言わずに館から出て行った。

スピカは泣いて泣いて泣きまくった。声がかれるまで、大声を出して

わめいた。それが終わると、顔を冷水で洗ってたちあがった。ここでいつまでもこうしていたって始まらない。

スピカはアルトへの想いを考えた。少し前は、彼は自分の使い魔、さらに言えば自分の所有物モノでしかなかった。

だけど、今は違う。スピカはアルトを愛してしまった。

一人の少年として、男として。

彼を想うと胸が痛んだ。彼が、他の女の子と楽しそうにするのが嫌だった。それが、たとえリイラでも。

そう思うと、最初から自分は気付かなかっただけで、アルトを好きだったのかもしれない。

アルトは今、どこにいるのだろう。

あの人のところへ行ったのかもしれない。

自分とは正反対のあの人。大人っぽくて、アルトも彼女といえると楽しそうだった。私といるときよりも。

負けたくない、と彼女は思った。

アルトを本当に理解し、愛しているのは、自分だ。

それは彼女ではない。決して彼女ではない。いや、彼女ならば嫌なのだ。自分でないと。

「アルト、戻ってきて……」

使い魔なんてやめてもいい。私のことを好きじゃなくてもいい。

「けど、アルトがそばにいないなんて、嫌だった。」

「戻らないなら、お前が迎えに行ったらどうだ、スピカ」

「エトワール!？」

いきなり館に入ってきた、貴族の少年の姿に、彼女は

大きく目を見開いて凍りついた。

魔女は一人涙する（後書き）

久しぶりの人が登場します。彼は今回のキーポイントなので、大活躍ですよ。

使い魔は協力者を得る

アルト「ハルメリアは、ケーキ作りを手伝っていた。手元など一度も見ていないのに、ちゃんとそれらしいものができているのは、才能だろう。」

アルトは何も考えたくない一心で料理をしていた。考えたら泣きたくなる。もう、恥も外聞も捨てて泣きわめくのは嫌だった。

とー。

「アルト、もうそのくらいでいいんじゃないの？」

『占いカフェ・カツサンドラ』の店主、

メリッサ「ウォーカーの冷たい声が飛んだ。」

「え!？」

「チョコケーキばかりそんなにいらない」

「あ、ご、ごめんなさい!」

アルトは赤くなって下を向いた。アルトが作っていたのは、すべてがチョコレートケーキだったのである。

これでは、誰の事を考えているのかバレバレだった。

チョコレートは、スピカの好物だった。

「はつきり言っただけだ、迷惑なんだけど」

厳しく言われ、さらにアルトは落ち込んだ。けれど、いいいいいよ、と言われるよりはいたたまれくない。

「一度帰りなよ。ごちゃごちゃ悩むから、こんなことになってるんじゃない？」

「嫌です!! 帰りたくない!!」

「いつまでも、ここにいる訳にはいかないんだよ!!」

正論を言われ、アルトは黙りこんだ。

彼女に迷惑をかけているのは事実であり、わがママを言っているのは、自分の方だった。

メリッサは間違っていない。

「逃げてばかりじゃ、何も変わらないよ!!」

「つつうつつつ!!」

その時、客が来たのでメリッサはすぐに出て行ってしまった。

「あら、あんた、久しぶりじゃない!! うちの子はいないの?」

弾んだような声が聞こえて来て、アルトは首をかしげた。

親しそうな口調は、よほど近いものだと思うせる。

「あんたにも紹介したい人がいるのよ、さ、入ってちょうだい。

ほら、イリオスも早く!! あ、いらっしやいませ、レティ様」

レティ様!? イリオス!? アルトはギョツとなり、慌てて隠れようとしたが、

時すでに遅し、だった。メリッサはすでに扉を開けている。

笑顔を浮かべているエトワール・クロウ・リルアラと、俺はいいです、

と彼に手を引かれて抵抗をしているイリオスと、きらきらと目を輝かせた

レティ・シャ・エルト・モランが入ってきた。

アルトとエトワールの目が合い、あつ、と二人の声がかぶる。

「なんであなたがここにいますか!?!」

「それはこっちのセリフだ!! 何でメリッサの店にお前がいるんだよ!!」

「あんたたち、知り合いなの?」

きよとん、としたようにメリッサが聞いてきた。二人が知り合いだとは知らなかった

らしい。レティがしたり顔で、説明を始めた。

「あのね、エトワールはスピカが好きなんだよ!!」

そしてね、アルトとはこいのライバルなの!!」

「れ、レティ様!!」

慌ててエトワールが叫んだ。彼女は意味が分かっているのか、いないのか、

くりくりとした目をパチパチさせていた。

「ふうん、あんた好きな人いたのね」

「う、うるせえな、余計なお世話だ!!」

「あら、かわいくないこと!! あんただって私の息子みたいなものののに」

その時、エトワールの顔が一瞬だけ悲しみを染まったのを、アルトは見た。

イリオスがとがった声で彼女に言う。

「母さん、用ってなんですか、私は忙しいんですが」

「か、母さん!？」

アルトがびつくりして聞き返し、イリオスに冷たい目で睨まれた。かなりの違和感があったのだ。イリオスとメリッサは、そう変わらな

ない年に見えた。年は聞いていないので、本当のところは分からないが。

「本当の母ではありませんよ。父が再婚したんです」

「そうなんですか、すみません」

ちよつと来い、とエトワールに引つ張られ、アルトは別室に連れ込まれた。

何度も来ているらしく、彼は勝手知ったる他人の家、といった感じだった。

「あんまり、あいつにメリッサの話させるなよ」

「どうしてですか？」

「あいつは、元々メリッサが好きだったんだよ。俺もだけどさ」

「結婚する前、ですよ」

「そうだ。だから、あいつはここにいつかないんだよ。俺はいつでも来てるけどな」

「……そうですか」

うつむいたアルトに、エトワールはここからが本題だ、と言った。

「お前、スピカが好きなんだろ？」

「な、ななななで知ってるんですか？」

「落ちつけよ。お前の態度見りゃ、誰でもわかるっつの」

「それがどうしたんですか」

アルトはひどい暴行をされたことを思い出し、臨戦態勢を取った。苦笑しながらエトワールは言葉を返す。

「協力してやるうつて言っただ、ひとまず座れ」

「協力！？　あなたが！？」

「ああ」

「それで、あなたにメリットがあるんですか？」

すっかり警戒しているアルトに、さらにエトワールは苦い

笑みを浮かべた。何もしないということを示すために、

少し後ろに下がる。

「メリットっていうか、俺は好きな女には幸せになってほしいものだからな」

「……わかりました」

彼の悲しみが見えた気がして、アルトは彼の提案に乗ることにしたのだった。

使い魔は協力者を得る（後書き）

もうすぐ恋愛編もクライマックスです。
がんばりますので、ぜひ見てください。

魔女は男に騙される

スピカールーンは、いきなり現れた貴族の坊っちゃん、エトワール・クロウ・リルアラの登場に驚いていた。

「どうした、スピカ？」

「どうしてあんたがここに？」

「質問を質問で返すのは俺好きじゃな……ごきやぐつ!!」
渾身の力を込めたパンチがエトワールの顔にめりこんだ。
変な声上げた後、彼はのたうちまわっている。

「それで、私に何の用？」

「お前に協力しに来たんだ」

「私に協力？」

不審そうにスピカは眉をひそめた。自身でも気がつかぬ内に、小さな拳を握りしめている。

随分と嫌われたものだな、とエトワールは思った。

まあ、一方的に好意を押し付けて、というかぶつけてきていたの
で、

彼には悪いが嫌われて当然だろう。

それに、アルトをボコボコにした時のことを、魔女は執念深く覚えていた。

「なにの見返りも求めずに？ それは話がうますぎない？」

「見返りはあるさ」

そう言つと、さらにスピカの警戒心が強まって行つた。
じりじりと後ろに下がっていく。

子猫を相手にしているような感覚に、エトワールは小さく苦笑していた。

毛を逆立てた猫のように、スピカが威嚇し始める。

「見返りつて、何？」

「お前が幸せになる」

スピカの目がまんまるに見開かれた。口が〇の形になる。

エトワールが近づいたが、逃げようとしなかった。

「好きな女には、幸せになって欲しいんだよ。たとえば、結ばれるのが、オレじゃなくてもな」

「因果な性格だね」

「だろう？　だからかな、オレはふられてばかりさ。

一度も、好きな相手にこたえられたことはない」

「ごめんね……」

「わかってたさ。あんたが、オレを見ていないことに。

だから、見ないふりをしていた。でも、それも今日で終わりだ」

スピカは自分から彼に近づいた。そつ、とその背に手を回す。

今度は、エトワールが驚く番だった。

「おい、スピカ、なんだよ！？」

「罪ほろぼし……」

スピカの顔には、聖母のような笑みが浮かんでいた。

体はとも小さいのに、心はかなり大きかった。

小さな体は、母のように温かかった。

「もう一度、言わせてくれないか？　オレをふつてくれ。

あきらめがつく」

「いいよ……」

エトワールはそつ、とスピカの体を突き放した。

勇気を奮い起して彼女の手を取り、口を開く。

「スピカ！　ルーン。オレは、この世で一番あんたが好きだ」

「ごめんね、私は、あなたと付き合えないよ。

好きな人がいるから……」

スピカはもう一度エトワールを抱きしめた。

彼は抵抗しない。スピカのしたいようにさせていた。

「また会いに来るよ。今度は、友達としてそばに

いさせてほしい。それならいいよな？」

「うん！！」

スピカはようやく彼を解放し、にっこりと笑った。

五分後、スピカはエトワールに作ってもらったお菓子を食べながら、作戦会議をしていた。

彼は以外にお菓子作りがうまかった。

どうしてか聞くと、知り合いのケーキ屋に入り浸っているからと答えが帰ってきた。一口食べて、知り合いが誰なのかを知る。

その味は、『占いカフェ・カツサンドラ』の味と似ていた。

悔しいぐらいおいしい味は、彼女の好きな味である。

チョコレートのムースをスプーンですくいながら、

スピカは彼女の顔を思い出して落ち込んだ。

アルトが、楽しそうに話していた人。

ケーキ作りが上手い人。

アルトが、赤くなつて照れていた、人。

「まずかったか、オレのケーキ!？」

ギョツとしたように味見を شدす彼に、スピカは小さく笑った。

「ケーキはすごくおいしいよ。だけど、あの人のことを思い出して悲しくなったの」

「ああ、あいつか」

「アルトは、本当にそこにいるの？」

「ああ……」

スピカは入れたばかりの紅茶のカップを落としそうになり、エトワールが慌てて受け止めた。あちあちあち、と悲鳴が上がる。

ちなみに、今日の紅茶はハーブティーだった。

スピカが入れたものだ。料理はからつきし駄目な彼女だが、何故かお茶を入れるのは上手かった。

「気をつける、スピカ!!」

「ごめん……」

エトワールはカップをスピカの前に置き、ため息をついた。

メリッサ「ウォーカーのことを想うと、彼も悲しみを

禁じえなかった。彼女は自分を「息子の友達」としか見ていない。告白したこともあったが、「あたしもあんたが好きよ」と軽く返され、落ち込んだのはつい最近のことだ。

「どうしたの？」

なんでもない、と言い返し、エトワールはフォークをケーキに突き刺した。一度に大きい塊を持ちあげ、一口で食べる。

行儀が悪かったが、スピカは小さく笑うだけで注意はしなかった。メリッサが見ていたら、げんこつの一つは落としただろう。

「……で、作戦の話をするぞ」

「うん……」

「あいつはかなり独占欲が強くてな、アルトは一步も外に出してもらえないんだ。頼っていったものの、

アルトも困ってると思うぜ」

ペラペラと出てくる嘘に、エトワールは自分にサギの素質でもあるのかな、と思った。

イリアスの方が、もっと嘘はうまいと思うが。

「それで、私はどうすればいいの？」

「アルトを取り返す。アルトへの思いを彼女にぶつけて戦うんだ。あなたより、私の方がアルトを愛してる、みたいな、ことを言ってな」

スピカは顔を真っ赤に染めながらも、コクリ、と首を縦に振って了承を示した。

魔女は男に騙される（後書き）

エトワールが大活躍です。彼には悪いですが、あの人には二人の愛の架け橋みたいな感じになっってもらっています。次回もみてください。

使い魔は男と密談する

アルト「ハルメリアは、

エトワール・クロウ・リルアラと
話しあっていた。

つまらない、とわめくレティ姫

やせっかく面白そうな話をしてるのに、
とぶつぶつ言うメリッサ「ウォーカーを
一時排除して、二人になっている。

ちなみに、イリアスは早々に姿を消していた。
彼はここにはいつかない。その代わりのように、
エトワールはちよくちよくここに来ていた。
メリッサもころよく迎えて嫌がらないし、
居心地がいいからよく居座ってしまふのだ。
「ボクは何をすればいいんですか？」

キッ、と顔を上げてアルトが聞いてきた。
かなり真剣な顔だ。エトワールはつい吹き出して
しまい、真っ赤になった彼から怒鳴られた。
「何で笑うんですかっ!!」

「いや、そんな顔しなくても思っただけな。
マジメだよな、お前」

「悪いですか!!」

「いちいちケンカ腰になるなよ、からかった
だけだろう」

アルトは渋々口をつぐんだ。

頭から湯気が出そうなほど顔が赤い。

エトワールは苦笑しながら口を開いた。

「お前は基本何もなくていい」

「え？」

「実行するのは、メリッサとスピカだけだ」

「どういうこと……ですか？」

「お前はただ隠れてればいいから。」

後は、スピカにバレて怒りだした時、

謝り倒してもう一度告白しろ」

「……ボク、完全にカッコ悪くないですか？」

泣きそうになるアルトに、エトワールは
耐えろ、とだけ言ったという。

砂糖を入れたストレートティーを

運んできたメリッサに、エトワールは
作戦の概要を話すことにした。

「メリッサ」

「なにになになにに、早く教えてよ」

きらきらと目を輝かせながら

二人を見ている。

とりあえずカップはテーブルに置き、

メリッサは空いている椅子に座った。

早く早くと明らかに目がそう言っていた。

エトワールが笑いながら言う。

「お前は、スピカを挑発しろ。」

スピカは上手く言いくるめてあるから、
徹底的に悪女を演じろ」

メリッサはにつこりと笑った。

ビクッ、とアルトが身をすくめる。

背中に夜叉が見えたのは、アルトの
勘違いではないだろう。

「どういうこと、かなあ？」

「だからー」

さらに説明しようとしたエトワールは、

メリッサの顔を見てギョツとなった。

愛想笑いをするが、もう遅い。

「そんなことしたら、人形の魔女に
嫌われちゃうじゃないの、

ばかあああああああつ！！」

「ぎゃあああああつ！！」

ボコボコに殴られるエトワール。

アルトは耳をふさぎながら、

現実逃避してスピカの笑顔を思い出していた。

一時間後、ようやく自分を取り戻したメリッサは、
自分が殴りつけたエトワールに治療の術を施していた。

「魔術が使えるんですね」

初めて見る魔術に、アルトは目をキラキラさせていた。
前に一度、スピカが壊れた物を直す術をかけたのを見ていた
が、その後で彼女が倒れたので、それどころじゃなくて
あまりよく覚えてはいなかった。

「私は、人形の魔女と姉妹弟子なんだよ。スピカが姉弟子。
だから、私も魔術くらい使えるよ」

「そうなんですか！！」

意外な関係に、アルトは目を丸くした。

メリッサは得意げにいろいろと話してくれる。

「私と彼女は、属性は違うけどね。

スピカは闇、私は光。

回復系がかなり得意だよ」

「みんなたのしそうすぎるい！！」

話している最中に、レティィシャ・

エルト・モランが飛び込んできた。

眉を吊り上げて怒っている。

ずるいずるいと地団太を踏み

ながらわめく姿は、とてもかわいらしかった。

「あたしにも何か任務ちょうだいよおおおつ。

スピカのためにあたしもなんかしたいいいいいっ」

メリッサとエトワールは目くばせしあった。

ややあつて、エトワールが彼女に近づく。

「レティ姫。あなたにもちゃんとした任務

がございますよ」

「ほんとう!？」

エトワールがそう言うのと、瞬時に

彼女の顔が輝いた。メリッサが部屋を

出て行き、少しして戻ってくる。

ケーキをいくつか詰め込んだ箱が、

レティに差し出された。

「レティ様、これをお父様たちに届けて

くださいませんか？ 代金はいりません。

メリッサ「ウォーカーからの気持ちですわ」

「おいしそう、あたしもたべていいの？」

「もちろんです。任務を果たしたら、

いくらでもいただいでください」

「やったあつ!!」

上機嫌になったレティは、エトワールを

伴って城に戻って行った。

体よくあしらわれたことに、まだ幼い姫

はまったく気づいていなかったという。

「さあつ、おいしいケーキを焼かなくちゃ。

アルト、手伝ってね!!」

「あ、はいっ!!」

とりあえず、二人はスピカが来るまでに大量のケーキを量産することにした。

昨日アルトが焼いた分だけでは、

甘党の彼女には足りないからだ。

部屋にはすっかりチョコレートの

甘い香りがたちこめ、帰ってきた

エトワールが閉口した。

「レティ様はどうだったの？」

「おいしいケーキを食べてご満悦ですよ」

「それはよかったわ」

「ところでさあ、お前ら、こんな香り

ばっかのところにいて、よく気持ち悪くならないな」

「当たり前でしょ。ケーキ屋だもの」

「食べるのも作るのも大好きですから」

エトワールが口元をひきつらせた時、

コンコンと戸を叩く音が響いて、

全員の顔が引き締まった。

戸の前にいたのは、白い髪を

二つに結って星の髪飾りを

つけた少女だった――。

使い魔は男と密談する（後書き）

次回はメリッサとスピカの
対決シーンを設けています。
殴りあたりはしませんが。
次回もよろしく願います。

魔女は任務を遂行する

スピカ「ルーンは、部屋で一人悩んでいた。エトワールが教えてくれたことを考えている。床に寝転がっているの、白い雪のような髪はくしゃくしゃ。その頬にも、床の木目のあとがついてしまっていた。

それでも、スピカは動かない。

怖かった。また、彼に会うのが。

拒絶されるのが怖かった。

あんなに怒っていたのだ。

あんなに、傷つけたのだ。

でも、二度と会えないのは嫌だった。

会いたい。彼に会いたい。

会いたい！！ アルトに会いたい！！

キツ、とスピカは顔を上げた。

「アルト、待っててね」

スピカは、白い髪をきつちりと

ツインテールに結び、ピツカピカに

磨いた星型の髪飾りをつけていた。

アルトがかわいいと言ってくれた、

かわいらしい桜色のローブ姿だった。

彼女は今、彼がいるという、

『占い喫茶・カッサンドラ』の

戸口の前に立っている。

胸がドキドキと高鳴る。

だが、こうしていても始まらない。

スピカは上質な木の扉を叩いた。

「はい、入って」

女性の声とともに、扉が開く。

勇気を振り絞り、スピカは中に入った。

大量のチョコレートケーキと、甘い香りが
スピカを歓迎した。

ついごとりとつばを飲み込んでしまい、

慌てて彼女は顔を引き締めて

その女性を見つめた。

アルトと仲がよさそうに話していた女性だ。

なかなかの美人だったので、それだけでも

負けたようで、彼女はムツとなった。

「座って」

「はい」

声をかけられ、スピカは言われた通りにした。

音も立てずに椅子に腰下ろす。

称賛の輝きがその目に見えて、スピカは戸惑った。

「何の話に來たのか、もう、わかってますよね」

「ええ。でも、その前にケーキをいただいてくだらない？

あなたのために焼いたのだから」

時間稼ぎ！？ でも、そんなことをする理由がない。

スピカは悩みつつも、ケーキの魔力に負けて

それを食べ始めた。すごくおいしいので、

止まることなく食べていく。

もう少しまじりかたたら、残してやるのに。

スピカは悔しげに顔をゆがめながら、大量のケーキを
次々と口に運んで行った。

瞬く間に、ケーキが載った皿は綺麗に空になった。

差し出されたナプキンで口元をぬぐい、

スピカはキツ、と彼女を見た。

「アルトを出してください、連れて帰ります」

「どうしようかしら、私も、アルトが好きなのよね」

「私の方がアルトを好き！！ 愛してる……」

とその時、何か物音が聞こえてきた。

首をかしげてその音が聞こえた方を

見るスピカに、彼女はひきつった笑みを浮かべた。

「今の音、なんですか？」

「息子がいるのよ！！ もう、まったくしょうがないわねえ、やんちゃざかりで！！」

「そうですか……」

スピカの興味が薄れたのを見て取って、

彼女はホツとして笑みを浮かべた。

音がした方をキツと睨んでいた

けれど、スピカが語り出したので、

そちらに慌てて目を移した。

「それで、お話の続きですが、

私はアルトを愛しています！！

アルトがいなくては、生きていけません！！」

「本当に愛しているの？」

「もちろんです」

彼女は意地悪そうな笑みを浮かべていた。

スピカは一瞬ためらい、だがそれを顔

に出さないようにしている。

「アルトは、あなたが使い魔としか見てくれない

、って言っていたけれど？」

音を立ててスピカが立ち上がる。

その顔が、さっ、と青ざめた。

今にも倒れそうな顔だ。

再び物音がし、彼女が戸を強く叩くと静まった。スピカの方にも、変化がある。

一歩も引かない強い目が、彼女を睨み据えていた。

「確かに、最初はそう思っていました。

最初は、彼は私の中で、所有物^{モノ}

でしかなかった。ですが、私は気づいたのです。

アルトは、ただの使い魔ではなく、一人の男、だと」

よしっ、と彼女がガッツポーズをした。

懸命にかわいらしい口を動かしているスピカは、それには気づかない。

「私は、アルトを愛してます。一人の男として。一人の人間として」

「なら、どうしてアルトを拒絶したの？」

その問いを聞いても、もうスピカは青ざめなかった。

「私は、怖かった。アルトと、使い魔と主としてではない関係を作るのが、怖かった。でも……もう、怖くない」

逃げるということは、それ以上先に進めないということに、スピカは気づいていた。

逃げれば、永遠に彼の心を手に入れることなどできない。永遠に、彼を失ってしまう。

そんなのは、嫌だった。

「それ以上に、アルトが好きだから、

恐怖より、アルトを好きの方が勝っているから、

私はもう逃げない。アルトを連れて帰ります」

くすくすと彼女は笑っていた。

カッとスピカの顔が赤くなる。

「何がおかし……！」

「おかしいのじゃなくて、嬉しいのよ」
「は？」

「出てらっしゃい、アルト、エトワール」

スピカは頭がくらくらしで、思わず椅子に座りこんだ。

アルトはともかく、エトワール！？

私にいろいろなことを教えた

彼が、なんでここにいるの！？

まさか……。

担がれたと知ったスピカの眉が、きりきりとつりあがった。

白い顔が、耳まで真っ赤になる。

ひっそりと出てきたアルトと

エトワールの頬を、平手打ち

した彼女は喚くような声で叫んだ。

「アルトも、エトワールも大嫌い！！」

シヨックを受けるアルトの顔を、

笑いながらメリッサが見ていた。

魔女は任務を遂行する（後書き）

今回はスピカ視点で物語を進めているので、メリッサの名前が最後しか出てきません。次はアルト視点のお話と、このお話の後どうなったかを書きたいと思っています。

使い魔は魔女を見守る

アルト「ハルメリアは、
エトワール・クロウ・リルアラと
共に、隠れていた。

ここからは、彼女の顔は良く見える。
この前かわいいと言ったローブ
を着ているのは分かって、アルトは嬉しくなった。
「ひとまずは、成功だな」

小声でエトワールが言ってくる。

はい、と笑顔で返し、アルトは彼女を見入っていた。
メリッサが座つてと言い、スピカが音も立てずに
座る。彼女がほめるような目を向けたので、
スピカは困ったような顔をしていた。

「何の話をしに来たか、わかってますよね」
久しぶりのスピカの声！！

アルトが身を乗り出しそうになり、
慌ててエトワールは止めていた。

「落ちつけよ」

「あ、ごめん……」

アルトは心を落ち着かせるために、
メリッサが用意してくれたお茶を口に運んだ。
ほどよく冷めている。お茶はローズティーだった。
メリッサの言葉に従って、ケーキを頬ばる
スピカは、とてもかわいらしい。

いつものように、瞬く間に平らげてしまった。
アルトは魅入られたかのようにそれを見ている。
エトワールはそこまで興味はないので、

お茶とともに用意させたアップルパイを食べていた。

甘さ控えめなそのパイは、彼の好物である。

と、そうこうしている間に、二人の会話は進んでいた。

「アルトを出してください、連れて帰ります」

「どうしようかしら、私も、アルトが好きなのよね」

「私の方がアルトを好き！！ 愛してる……」

アルトが椅子を転げ落ちた。かなり大きな音が響く。

エトワールは舌打ちして彼を助け起こす。

アルトの顔は、これ以上ないほど真っ赤だった。

「このバカ！ バレたらどうする！！」

「ごめ……びつくりして……」

小声でやりとりし、二人は気配を殺した。

スピカが不審そうな顔をしていて、

メリッサがごまかしているのが見える。

メリッサ、ごめん、とアルトは心中で謝った。

顔の赤味はなかなか抜けない。

メリッサの言った通りだった。

スピカは、自分のことを愛している。

自分だけじゃないと知り、アルトは

嬉しかった。涙が出そうなくらい、

嬉しかった。

「これ、いるか？」

涙目になったアルトを見て、エトワールが

白い上等そうなハンカチを差し出してきた。

アルトは気持ちだけ受け取って断り、

スピカの方に視線を戻す。

「アルトは、あなたが使い魔としか見てくれない

、って言っていたけれど？」

その言葉を聞き、スピカが青ざめた。

彼女が以前倒れたことを思い出し、アルトも青ざめる。

思わず扉を開けそうになったアルトを、慌てて

エトワールがはいじめにした。彼の肘がテーブルにあたり、ガシャン、とカップが揺れる。

メリッサが扉を叩くのが見え、エトワールはそのまま後ろに下がった。

「黙って見ていられないなら、お前、家に帰すぞ」

「ごめん……なさい……なるべく静かにする」

怖い顔で睨まれ、アルトはしゅん、となった。

エトワールはアルトを解放し、アルトが椅子に座る。

エトワールは予想外な大変さに、ため息をついていた。

アルトは基本大人しいが、スピカがからんでくると違うのである。

「確かに、最初はそう思っていました。

最初は、彼は私の中で、所有物^{モノ}

でしかなかった。ですが、私は気づいたのです。

アルトは、ただの使い魔ではなく、一人の男、だと」

エトワールは、その言葉を、一抹の寂しさと共に

聞いた。忘れたいと思っても、なかなか忘れられない。

彼女への想いを、捨てることなどできない。

「エトワール……」

「大丈夫だって。そんな顔するなよ。

俺は、スピカを好きになったこと、

後悔してないからな」

気遣わしげに見られると、腹が立つものがある。

だが、エトワールは懸命に怒りをおさめた。

誓ったのだ。彼女をあきらめると。

「私は、アルトを愛してます。一人の男として。

一人の人間として」

スピカは一步も引いていない。

アルトは少し気持ちが落ち着いていた。

エトワールの方は、気にされても向こうが

困るだけだと気づき、もう見ないようにしている。

「なら、どうしてアルトを拒絶したの？」

「私は、怖かった。アルトと、使い魔と主としてではない
関係を作るのが、怖かった。でも……もう、怖くない」

アルトの心が温かくなった。まるで、熱いお茶を
飲んだ時のような温かさだ。

「それ以上に、アルトが好きだから、

恐怖より、アルトを好きの方が勝っているから、

私はもう逃げない。アルトを連れて帰ります」

それを聞いた後に、メリッサが笑いだした。

ようやく出ていいというお許しが出て、

アルトたちは扉を開けて出ていく。

スピカは一瞬驚いたような顔をしていたが、
騙されたことに気づくなり、怒りをあらわにした。

「アルトもエトワールも大嫌い！！」

平手打ちを受け、宣告されたアルトは、

今度こそ泣きそうになっていた。

その後、アルトはスピカの機嫌取りに

忙しかった。スピカはつん、とそっぽ向いた

まま、彼の方を見ようもしない。

すべてのネタバラしをした、エトワールも。

「やっぱり思った通りだったな」

「かなりくつきりとあとがついてるわね」

くすくすとメリッサが笑っている。

エトワールも笑ったので、キツとスピカは
彼を睨みつけた。振った腹いせではないと

は思うが、振ったすぐ後にこんなことを

されるのは苛立たしかった。

「スピカ、ごめん！！ 試すようなこととして！！

でも、不安だったんだよ!!」

「うるさいうるさいうるさいっ!!」

スピカはケーキを頬ぼったまま、

叫ぶように言った。エトワールも許せないが、それ以上に許せないのが、アルトだった。

裏切られた気持ちになったのだ。

「もういい! アルトなんか……」

「あら、もらっちゃうわよ?」

「ダーリンはどうしたの?」

計画のことを話した後、メリッサは既婚者であることも彼女に話していた。じろりと睨まれ、メリッサはくすくす笑っている。

「あら、彼氏としてじゃなく、息子として貰い受けるのよ。そうしたら、アルトはあなたに会わせないわよ。

大嫌い、なんででしょう?」

スピカが今にも泣きそうになった。

冗談だと気づいていないらしい。

「大嫌いだけど、大好きなの!!」

「矛盾してるわね」

「うるさいっ!!」

大好き、と聞き、アルトが彼女を抱きしめた。

スピカは突き飛ばそうとしたけれど、

結局やめて彼の背に手を回す。

唇と唇がぴたりと重なった。

「私もダーリンに会いに行こうつと!!」

ひさしぶりに工房に行くわよ」

メリッサはその場にあつたケーキを

包むなり、すぐに店を飛び出した。

エトワールも中にいるわけにはいかず、外に出る。と、歩いてくる少女の姿が見えた。

- - リイラである。

「おい、今中に入らない方がいいぜ？」

「何ですか？ あなたに言われるいわれはありません」

「スピカとアルトが中にいるんだ」

リイラは目を見開いた。どういうことかと問いただそうと

したけれど、別な店を紹介するから行こうと言われ、

悪くない気持ちになって彼の手を取った。

使い魔は魔女を見守る（後書き）

ついにスピカとアルトが結ばれました。

次回は、突然ですがスピカが

竜の子供を育てるという話に
しようと思います。

次回もよろしくお願いします。

魔女は竜の子供を見つける

スピカ＝ルーンは、久しぶりに笑顔で目覚めた。隣には、当たり前のように、使い魔の、

アルト＝ハルメリアがいる。

そのことが、何にもまして嬉しかった。

当初彼女は使い魔はやめていいと言ったのだが、アルトが断ったのでそのままなのだ。

アルトの意見を聞くと、スピカの近くに自分以外の？使い魔？がいるのが嫌、らしい。

アルトは久しぶりに家に帰るなり、家中をピッカピカに磨き上げ、花壇に花の種を植え、使っていない鶏小屋につがいのひよこを置いた。

もちろん、スピカのために最高の朝食も作ってくれた。

今日のメニューは、たつぷりチョコレートソースを

かけた鶏肉のソテーと、野菜サラダ、野菜スープだった。

やっぱり最高のお味である。スピカは上機嫌で食べた。

「行ってくるね、スピカ！！」

「いつてらっしゃい！！」

今日からアルトはメリッサのもとで働くらしい。

余ったケーキがあったら持ち帰ってあげるね、と言ってくれたのが、とてもうれしかった。

スピカはたまっていた仕事を片づけ、手持ち

ぶたさになって裁縫を始めた。チクチクと

針を動かす音だけが響く。

青い絹地に、紅い花が咲いた。

しばらくそれをやっていたが、あきてスピカは外に出た。馬車に乗り、久しぶりに村の方へ行く。

村の様子は相変わらずだった。スピカは両親を殺したため、疎まれている。全然来ないリイラに会いに行ったのだが、彼女は留守だった。

反応は相変わらずで、スピカは石をぶつけられて森の中に逃げた。と、その時である。

世にもかわいらしい声が聞こえてきた。

スピカが振り向くと、そこには紅いきれいな

色をした竜がいた。とてもかわいらしくて、

スピカはそれに手を伸ばす。まだ、子供のようだった。

「かわいい……」

火を吐くかもしれない、と思ったが、人懐こいらしく、竜はすり寄っただけだった。親はいないのか、と森中をさがしたけれど、結局暗くなるまで見つからなかった。

「おいで、オリオン……」

名前をつけた竜の子供を胸に抱くと、スピカは馬車に載って家に戻った。アルトはすでに帰っていた。

「ただいま、スピカ!!」

「お帰りなさい、アルト!!」

「あれ、その子は？」

「オリオンよ」

当たり前のように言われ、あ、そうなの、と言いかけて、アルトは慌てて口をふさいだ。

「じゃなくて、どうしたのってこと。その子!!」

「森で見つけたの。親がいないみたいだから、

飼ってもいいでしょう、アルト？」

涙目で言われると、アルトも動物とかが嫌いではないので、元の所に返してこい、とは言えなかった。

「いいよ。でも、ちゃんとスピカが面倒みてね。

ちゃんという教えるんだよ」

アルトはにこりと笑うと、オリオンと名付けられた竜の子供の

頭を優しく撫でた。オリオンはかわいらしく鳴き、アルトの手にも顔をすりよせてくる。その様子はとてもかわいい。

「じゃあ、ごはんにしようか」

「うん……」

幸せそうに微笑む二人。だが、その幸せは長くはもたなかった。

それが壊れたのは、アルトが今日の夕御飯の鳥の丸焼きを持ってきた、その時だった。オリオンは小さな口をあんと開けるなり、すごい勢いでそれを平らげてしまったのだ。

小さいとはいえ、さすが竜。ものすごい食欲である。

そして、オリオンの種族もこれではつきりした。

満腹になった彼は、大きな火の息を放ち、それが

家中に燃え移ったのだ。火竜の息そのものである。

「うわああああああっ！！ 家が燃える燃える！！」

「お、オリオン！！ 駄目でしょう！！」

「いいから早く火を消して！！」

慌ててスピカは術を唱えて水を出したので、

家は燃えずに済んだけれど、アルトはこの子

大丈夫なのかなあ、と思うのだった――。

魔女は竜の子供を見つける（後書き）

スピカが火竜の子を連れてきました。
すごい食欲と悪びれない（てゆーか
悪いことがわからない）火の吹き方
に、アルトはもう大変な感じです。

魔女と使い魔は言い合いする

「ぎゃあああああつ！！」

森の中に、大声が響き渡る。

びくつ、となり、スピカ「ルーンは目覚めた。

ベッドから落ちそうになり、慌ててベッドのへりを掴む。寝間着のまま外に出ると、泣きそうな顔をしたアルト「ハルメリアがいた。

「オリオンが、オリオンが……」

「オリオンがどうかしたの！？」

スピカは青ざめた。眠気が一気に吹き飛ぶ。

「オリオンが、ひよこを食べちゃったんだよ！！」

花壇も種が土ごとなくなっちゃってるし！！」

キツと涙目でアルトはスピカを睨みつけた。

鶏小屋を覗き込むと、そこにはちいさな骨が

いくつか転がっているだけだった。やっておい

た餌も、一粒もなくなっている。

花壇は、否花壇であったものは、煉瓦^{レンガ}だけがあった。

その原因である竜の子供、オリオンは満足顔で空を飛んでいる。

「オリオン！！駄目じゃないっ！！」

スピカは降りてきた竜の子供を怒鳴りつけた。

オリオンはなんで怒られているのかわかっていないらしく、かわいらしく首をかしげている。

だが、アルトの怒りはスピカに向いていた。

「こんな赤ちゃんが、悪い事とか分かる訳ないじゃない！！」

スピカ、君がちゃんと見てないから悪いんだよっ！！」

スピカはうつむいた。昨日、スピカは確かにオリオンと

一緒に寝ていたのだが、窓を閉めるのを忘れていたのだ。

完全にスピカのせいだった。

スピカはムツとなりつつも、あえて口を開かなかった。
彼の言っていることが正しかったからだ。

二人はお互いに口を利かないまま、小屋に戻った。
オリオンも追いかけて入ってくる。

食事を作るために厨房に入ったアルトは、
悲鳴のような声をあげて戻ってきた。

「どうしたの!？」

「オリオンが材料全部食べちゃったんだよ!!」
スピカは慌てて厨房に入った。貯蔵庫を
見てみると、何一つ残っていない。

卵の殻や、鍋の鉄の部分が転がっているだけである。
チョコレートも、ミルクも、野菜も、小麦粉もなかった。

「スピカ、やっぱりオリオンを返して来てよ。」

こんなんじゃない、僕達が暮らしていけないよ。
お金も無限にある訳じゃないんだよ」

困ったように言われ、スピカはついにキレた。

朝からのストレスが一気に爆発したのだ。

「アルトはいいっていったじゃない!!」

それなのに返してこいだなんて!!

無責任よ!!」

「無責任は君のほうだろ!!」

アルトとスピカは言い合いを開始してしまった。

お互いを睨みあい、罵り合っている。

その間に、オリオンはがじがじと壁をかじっていた。

「オリオンッ!!」

アルトの怒りの矛先が竜の子供に向く。

物をぶつけてこちらを向かせようとしたので、

スピカはさらに眉を吊り上げた。

オリオンをしっかりと抱きしめる。

「さつき分かる訳ないって言ったじゃない!!」

オリオンにひどいことしないでよっ!!」

「教えてやらなきゃいつまでもこうだろ!!」

しっけは動物に必要なんだよ」

「あんなのしっけじゃないわ!! いじめよ!!」

オリオンはスピカの腕の中でじたばた暴れていた。

あんなに食べたと言うのに、まだ腹が減っているらしい。

スピカはさらに腕に力を込め、不満そうにオリオンは唸った。
とー。

「きゃあっ!!」

いきなり噛みつかれ、スピカは驚いて手を放した。

オリオンはすぐに壁にたどりつき、再びかじり始める。

血がローブに伝わって滴り落ちた。

「オリオン……」

スピカはかわいがっていた動物にかみつかれ、ショックで泣きだしてしまった。オリオンに悪気はない。

ただ、邪魔をしたから噛みついただけだ。

オリオンは、何も知らない。悪い事も何も知らない。

アルトがオリオンに近づこうとした、その時。

グラグラと小屋が揺れ、やがて倒壊したー。

魔女と使い魔は言い合いする（後書き）

ついに記念すべき二十話です。

スピカとアルトのケンカの話、

だったのですが、とんでもないことになってしまいました。キャラが勝手に動いてやっちゃいました。

次回は抑えるように気をつけます。

魔女と使い魔は友をたよる

小屋が倒壊してしまったので、スピカとアルトはメリッサ・ウォーカーのもとへやってきた。

彼女は笑顔で迎え入れてくれる。

「あら、いらつしやい二人とも。

新作のケーキ食べていけない？」

「「食べます！！」」

見事に声が重なり合い、仲がいいわね、とメリッサに

からかわれ、二人は紅くなった。と、ふわふわと空を飛んでいるオリオンに目が止まり、そこでやっとここに来た理由を思い出す。

「あのー、メリッサ？　しばらくここに置いてもらってもいい？」

「あら、どうして？」

メリッサはさらに笑みを深くしたが、ケーキとお茶を二人の前に置きながら聞いた。二人は目を見合わせる。

やがて、アルトが説明することになった。

「家が、崩れちゃったんだ」

「はい？」

「だから、家が壊れたの！！　この子、オリオンっていうんだけど、ものすごく食欲があつてね、家をかじっちゃったんだ」

と、オリオンがごちそうを発見し、ケーキを食べようとそこに

向かったところだった。ホールケーキめがけて一直線だ。

だが、メリッサがその襟首を掴むや、ぽいつ、と放り投げたので、オリオンはケーキを食べることができなかった。

ムツとなり、噛みつこうとしたら、頭を強く叩かれた。

さらに噛みつこうとしたけれど、今度は拳が飛んできて吹っ飛ばされる。

渋々オリオンは引き下がり、メリッサが目の前に置いた分だけを

口にした。二人が驚いたようにメリッサを見る。

「すごいね、メリッサって……」

「そうね……」

「しっけはちゃんとしないと駄目よ？」

母のように言ってくるメリッサに、二人はメリッサってタダものじゃないな、

と想いながら、ケーキを一口口に運んだ。

ふわり、とスピカの顔がほころんだ。それは、チョコレートケーキだった。

だけれど、ただのチョコケーキではない。アイスクリームを使った、とろけるようにおいしいケーキだった。

アルトは悔しそうに眉をしかめた。ケーキ屋なのだから、メリッサの方が

ケーキを作るのが上手いのは当然なのだが、いつもアルトはメリッサの料理

の腕に嫉妬してしまうのだ。特に、スピカが彼女のケーキで笑っている所を見ると。

「アルトは子供よねえ」

メリッサがそう言い、アルトの眉がつりあがった。

訳が分からない、といったような目でスピカが首をかしげる。

「どうして？」

「アルトったらねえ、私のケーキの腕前ー」

「わああああああっ!!」

メリッサがくすくすと笑いながら言いかけたので、

真っ赤になったアルトが大声を發した。

手を振りまわして彼女を睨む。

スピカは首をかしげたけれど、それ以上聞かずにケーキを食べ進めた。

「それより、メリッサ、さっき聞いたことの答えを教えてよ」

「もちろんOKよ。私は、あなたたちのことを自分の子供のように

想ってるんですもの。アルトは家で働いているし、スピカにも働いてもらうつもりでいるけれどね」

「え!？」

スピカが音を立ててフォークを置いた。自分の家事の腕前を思い出したのだろう、彼女は青ざめていた。

「わ、私、料理もそのほかの家事も苦手で……」

「裁縫が得意なんでしょう? 開いたスペースに、仕立用の場所を作ろうと思ってたの。接客はしなくてもいいわ。

一人、やとうつもりでいる子がいるから」

その時だった。

ちりりん、と扉につけられた鈴が鳴った。

一人の少女が、そこにやってきたのだ。

それは、リイラ「コルラツジだった。

スピカの親友の少女である。

「リイラ!？」

「スピカ!？」

お互い、ここにいることを知らなかったなので、

二人は目を丸くしてみつめあっていたー。

魔女と使い魔は友をたよる（後書き）

スピカたちが場所を移ります。
これからも新キャラは増やす
予定ですので、次回も
見てください。

魔女たちは新たな生活を始める

スピカⅡルーンは、アルトⅡハルメリアと共に、『占いカフェ・カッサンドラ』で働くことになった。

スピカの親友・リイラⅡコルラツジも同じである。

スピカは朝からちくちくと針を動かしていた。なんのへんてつもない布に、花や蝶などの刺繍がなされている。

ほぼ手元を見ていないのに、すごい才能だった。

アルトは接客やケーキ作りの合間に、彼女の姿を目で追っていた。スピカは裁縫に夢中で、彼の方を見ようもしない。

それに少しショックを受けながらも、アルトはつい彼女を見つめてしまうのだった。白い頬を上氣させて彼女は、本当に愛くるしい。

一方、竜の子供、オリオンはというと、ふわふわ浮いてお客を魅了しながら、

火を吹いたりして活躍していた。メリツサⅡウォーカーも上機嫌である。

「アルト、仕事してよー！」

それに比べ、リイラは明らかに機嫌が悪かった。少しアルトの目がさまよう

だけで、カッとなって怒鳴りつけたりしている。

アルトは恐縮し、そのたびに謝るのだった。

「リイラ、休憩に入っていないわよ。イライラしているんだったら、仕事に入らなくていいわ」

メリツサが厳しい声で告げると、リイラはキッと彼女を睨みつけたが、

やがて黙って店から部屋へと降りて行った。

スピカは驚いたような顔だった。気が長い方ではなかったが、こんな

理不尽な怒り方をする女の子では、リイラはなかった。

それなのに、彼女に何があったのだろう。

「メリッサ、私も、休憩してもいい？」

「いいわよー」

そもそも、スピカが抜けたところで仕事に穴は開かない。

彼女の仕事は急ぎではないのだ。

メリッサが簡単にOKを出したので、スピカはリイラのもとへ急いだ。

「リイラ！」

スピカが声をかけると、うつむいて膝を抱えていた彼女は、びくっとなって顔を上げた。その目が涙でぬれている。

「一体何があったの？ どうして泣いてるの？」

「わ、私ー」

リイラは迷うように口を濁した。目がさまよい、壁のあたりを見る。それでもスピカが重ねて問うと、彼女は告白した。

「私ー。メリッサさんとアルトに嫉妬した……」

「嫉妬！？ どうして!？」

「だって、スピカは私を頼ってくれなかった!！」

スピカの顔も悲しみに染まった。

「私が村にいけない理由、知ってるでしょ？」

この前村に行った時、追い払われた記憶はまだ新しい。

リイラはそれでも、悲しみが消えることはなかった。

「それは分かってるわ。でも、連絡くらいくれてもよかったんじゃないの？ 私たち、親友だよね？」

責められたスピカは、ムッとなった。せっかく会いに行ったのに、あの日、彼女はいなかったのだ。

攻撃を受けるのも覚悟したのに。

「私、村に行ったの……でも、その時、リイラはいなかった」

「え!？ 村に行ったの？」

リイラの顔から血の気が引いていた。震える声は、どこか怯えを含んでいる。

「逃げて……逃げてスピカ!!」

「どうしたの、リイラ? 何があったの?」

すすり泣く声が彼女の口からもれた。顔を手で覆い、

リイラはぼろぼろと涙をこぼして泣いている。

ただならぬ様子に、スピカは慌てた。

「ちゃんと答えてリイラッ!!」

「魔女狩りが始まったの……。魔法生物も次々と狩られてるって教会の奴らが言ってたわ!! あいつらは魔法生物や魔女の匂いに敏感な犬を持ってるの!! ここもいずれ気づかれるわ!!」

魔女狩り。その言葉に、スピカの体も震えた。

捕まったら、確実に死が待っている。魔女狩りに掴まったもので、生きていた者は一人もない。

それに、魔女の使い魔にもそれは害を及ぼすのだ。

「嘘……でしょう? 嘘だって言ってる!!」

スピカはリイラの襟首を掴んで揺さぶった。八つ当たりだってわかってる。

だけど、どうしても彼女に嘘だって、冗談だって、言って笑ってほしかった。

リイラはただ泣いて首を振るばかりだ。

スピカは自身もまた泣きたいと思っていた。アルトはどこまでもついて

きてくれるだろう。だが、スピカは彼を巻き込みたくなかった。

せっかく、幸せな生活が待っていたのに、彼を命の危険のある旅に同行させたくはなかった。だったら、だったらー!

「私が消えるしかないじゃない……」

「スピカ!？」

「リイラ、私、旅に出るわ。アルトのこと、頼んだわよ」

「スピカ!! あなた一人で行くつもりなの!？」

「そうよ。誰も巻き込みたくない」

スピカの目には決意が秘められていた。唇は強くかみしめられ、手は痛いほどに握りしめられている。

「駄目！！ 行かせないわ！！」

リイラは言っても聞かれないと思い、力ずくで止めようと

彼女に飛びかかった。スピカは軽くよけ、壁に頭を打ちつける。

「うっ……」

「ごめんね、リイラ」

スピカは彼女の頭に手刀を叩きつけた。信じられないというかのような顔になり、リイラはフツと倒れ込む。

「本当に、ごめんね……」

スピカの紅い目から透明な雫がこぼれおちた。

リイラをそのまま床に横たえ、スピカは部屋を出る。

「あら、もう休憩は終わり？」

「ええ。布を買ってくるわ。どうしても足りないものがあるの」

スピカは声の震えを隠そうと必死だった。笑顔を作り、

悟らせないように苦労をする。

「いつてらっしやい」

アルトが気づいて笑顔で手を振った。スピカは泣きそうになるのをこらえなくてはならなかった。彼が好きだ。離れたくなんかない。

ずっとそばにいたい。だが、彼を失う痛みよりはたえられる。

「いつてきます」

スピカは愛しそうにアルトの手に触れ、それから温かい店を、二度と戻らないであろう居場所を、出て行った――。

魔女たちは新たな生活を始める（後書き）

スピカがアルトのそばを離れます。
ずっとギャグが多かったので、
今回はシリアスが続くと思います。
次回も見てください。

魔女は失踪する

スピカールーンは走っていた。

あまり体力があるほうとはいえないので、少し走っただけで息が切れてしまっている。

顔はつねではないほど紅い。それでも、彼女は走るしかなかった。

もつと遠くに。もつともつと遠くへ。

魔法は使えない。あまり強い術を使つて、

倒れるわけにはいかない。なので、スピカは体力をふりしぼって走っていた。

「アルト……」

彼にはもう会つてはいけない。そのはずなのに、スピカは会いたくてたまらなかった。

紅い目から雫が垂れ落ちる。前会わなかった時も、たえがたい痛みが胸を刺していたのだ。

だが、永遠に失うよりはマシだ。

たえなくてはならない。絶対に……。

スピカは齒を食いしばって胸の痛みにたえていた。

その様子を、一人の少女が見ていた。

ためらいがちな視線である。装飾の施されたナイフを握る手は、震えていた。

彼女は、スピカの暗殺者、ディオナールである。
「スピカールーン……」

今なら彼女を殺せる。彼女はこちらに気づいてもいない。なのに、なのに……。

どうしても手も体も動かなかった。

このナイフには、致死量の毒が仕込んであった。

投げつければ、いくら魔女であろうとも、死ぬはずだ。

だけど、殺せない。手が少しでも動けば、殺せるのに。デイオナはまだ誰かを殺すことをためらっていた。

かなり前に、この魔女を傷つけたことがある。

その時感じた胸の痛みは、今も胸にある。

「兄さん……私、どうしたらいいの？ 兄さんはあいつを、スピカールーンを憎んでるの？」

小声で呟いても、それにこたえる声はない。

彼女の兄はもうこの世にはいないのだから。

彼女はどうしても動くことができないまま、

スピカールーンが、敵である少女が、

通り過ぎていくのを見つめていた――。

スピカは完全に息を切らしていた。ずっと走っている。

体力のない彼女に、たえきえるものではない。

スピカは少し立ち止まった。無理をして走っていたからか、

『占い喫茶カツサンドラ』からはかなり離れていた。

……しまった！ 舌打ちをしながらスピカは後退する。

彼女は、いつの間にか、村に来ていたのだ。

両親と、愛しい妹アネット＝ベルの思い出が残る、村に。

何も考えずに走ったのが悪かったようだ。

「魔女だ！！ スピカールーンがいるぞ！！」

どうしよう、このままでは掴まってしまう！！

スピカの顔からだんだん血の気が引いて行った。

もう走ることはいらない。

それに、この村に今はリイラ＝コルラツジはいないのだ。

「教会に連絡しろ！ ここに魔女がいるぞ！！」

スピカは何もかもをあきらめてへたり込んだ。

唯一の救いは、そばにアルトがいないことだろう。

スピカを発見した男が、彼女の白い手を掴もうとした、

その時だった。

鈍い音を立てて、巨大な簾が落下してきたのである。それは古臭かったが、頑丈そうな造りだった。

迷っている時間は無い。

スピカはそれをひつつかむと、何も考えずにまたがった。何の前触れもなく簾が浮き上がる。

スピカは、数秒後には空を飛んでいた。

「魔女が逃げるぞー！！」

男の怒声を聞きながら、スピカは安心した気持で空をただよっていた。果物のポプリの匂いが、さらに気持ちを高揚させる。

師匠の匂いだった。師匠が助けてくれたのだ。

スピカは別れ際の彼女の言葉を思い出していた。

『たとえ分かれても、あなたは変わらず私の弟子だから。いつでも見てるよ、あなたを。いつでも助ける』

師匠は、ちゃんと見ていてくれたのだ。

ちゃんと、約束をはたしてくれたのだー。

その頃、アルトとメリツサ・ウォーカーは、心配そうな顔になっていた。買い物に行ったはずの彼女は、いつまでも帰って来ない。

それに、リイラのことも心配だった。

客の切れ間に、アルトはリイラがいる部屋へと向かった。

「リイラさん？」

声をかけるが、返事がない。いぶかしげに思って扉を開けると、倒れ込んでいた彼女が見えた。

「リイラさん！！」

慌てて駆け寄る。息をしているのが分かり、

アルトは少し安心した。揺り動かすと、彼女の目がぱちりと開いた。

「スピカ！！」

リイラの第一声は、せつぱつまつたような悲鳴のような声だった。

「スピカ！ スピカ！ スピカ！！」

「落ち着いてください！ スピカさんは、買い物に行っただですよ」
リイラはようやく落ち着きを取り戻したらしく、涙が浮かんだ目でアルトを睨みつけてきた。

「買い物ですって！？ そんな訳ないわ！ スピカは、旅に出るって言っていたんだもの！！」

「旅なんで！？」

そんなことは初耳だった。目を大きく見開くアルトに、苛立ったようにリイラは叫んだ。

「魔女狩りが始まったの！！ あんたを巻き込ませないために、スピカは一人でいなくなったのよ！！」

「スピカが……」

アルトは強いショックで口が利けなくなった。ずっと一緒にいたいと思った少女が、黙って姿を消してしまったのだ。

しかも、心配させまいと嘘までついて。

アルトは泣きそうな想いで立ち尽くした――。

その頃、『占い喫茶カツサンドラ』では、

やきもきしながらメリッサがアルトの帰りを待っていた。

うわのそらでケーキを作りながら、ため息をつく。

と、その時だった。

どんどんどん！！といきなり戸が乱暴に叩かれたのだ。

「おい！！ 開ける！！ 魔女がいるのは分かっているんだぞ！！」

メリッサは青くなり、作りかけのケーキを床に取り落とした――。

魔女は失踪する（後書き）

魔女が彼らの前から姿を消したことを
気づかれます。店にやってきた、
教会の使者！！二人はどうなるのか！？
次回も見てください。

使い魔は魔女を追いかける

扉を蹴破る音がその場に響き渡った。

メリッサは一瞬肩を震わせたが、やがて

キツと顔を上げると、入ってきた男と対峙した。

「ここに何の用かしら？　ここはただの店よ。

営業妨害で訴えられたいのかしら？」

「客は一人もいないだろう」

男はにやりと口元をゆがめていた。その目にあるのは、狂気。

メリッサは底知れぬ恐怖と必死に戦っていた。

「失礼なと言わないでくれますか？」

いつもはもつと客がいるのよ」

「魔女がここにいるだろう？　早く出せ」

男はメリッサの言葉にも耳をかさず、どこを見ているのか
分からない目で一方的に言った。

メリッサは半分嘘で半分本当なことを言い返してやった。

「魔女はここにはいないわ。スピカールーンは、

ここにはいない」

「お前使い魔か？」

「私は使い魔じゃないわよ！！」

そう叫んだものの、彼女は冷静ではいらなかった。

ここには魔女の使い魔がいる。アルトがこちらに來ない
ことを祈るばかりだった。

「妖しいな……これでもくらえっ！！」

「きゃああっ！！」

メリッサは悲鳴を上げた。いきなり液体を体にかけられたのだ。

それは、おそらく聖水だろう。

メリッサの肩にかかったそれは、服ごしでもかなりの効果が
あり、彼女の肌を焼いた。

否、とかしたのだ。聖水は、魔女は使い魔に対してかなりの劇薬になる。

「う……ああ……」

メリッサはあまりの痛みにつずくまった。男はそんな彼女を蹴り倒し、胸倉をつかんで引き立てる。

「お前、魔女だな？ 殺してやる!!」

片手で出されたナイフが彼女に迫る。メリッサは悔しげに顔をゆがめたが、覚悟を決めて目を閉じた。

その時である。

「やめろつ!!」

叫んだのは、アルトだった。投げつけられた調理器具が男の手に当たり、ナイフが落下する。

「メリッサ、逃げて!!」

隣にいたリイラが、男に飛び蹴りをくらわせて

その上に乗っかって手首をひねりあげた。

「この、小娘が……!!」

力が足りず、すぐにリイラは突き飛ばされてしまった。

だが、キツと睨みつけて彼女は叫ぶ。

「殺せるもんなら殺してみなさいよ、私は人間よ。

あなたたちに人間が殺せるの?」

男は憎々しげに彼女を睨みつけたが、手を出そうとは

しなかった。教会や村の人間は、魔女たち以外には

手を出してはいけないという掟があるのである。

リイラは教会の娘の知り合いであったので、

それを覚えていたのだった。

「逃げてメリッサ!! このままじゃ殺されるわ!!」

ここは私が守る!! 教会の奴らには手出しさせないわ!!」

アルトはどちらに加勢したらいいのか迷っていた。

そのすきについて、男が聖水を彼に投げかけてくる。

「冷たい!!」

メリッサと男とリイラの目が大きく見開かれた。
アルトは真正銘スピカールーンの使い魔である。
一方的に契約を反故にすることはできないから、
彼はまだ契約を遂行中のはずだった。

なのに、聖水に彼は反応しなかった。

彼の指一本でさえ溶かすことはできなかったのだ。

「アルト、あんたって何者なの？」

「……ぼ、僕にもわからないよ。どうしてこんなことになっただろ！？」

アルトは混乱して頭をかきむしった。

と、謎の声が彼の頭に響いてくる。

「坊がスピカの使い魔かや？ わらわはスピカールーンの名付け親にして師匠じゃ。あの娘に会いたいのならば、わらわの言った通りにするのじゃ？」

「あなたがスピカの名付け親？」

この声はアルトにしか聞こえていないらしかった。

驚いたような顔でリイラが見ている。

「アルト、誰と話しているの？」

「坊、スピカの妹弟子を連れて外に出るのじゃ。」

あの娘の言ったことは本当じゃから気にすることはない？

一瞬何のことか分からなかったが、思い出して合点がいった。

メリッサとスピカは姉妹弟子である。スピカの妹弟子とは、メリッサのことに間違いなかった。

「リイラ、ここは頼んだよ、メリッサ来てっ！！」

戸惑う彼女の腕を引っ張ると、アルトはそのまま外に飛び出した。男は追ってこない。

うまく、リイラが足止めしてくれているのだろう。

「どうしたっていうの、アルト！！ いきなり何なの！？」

「妹弟子にこう言うがいい……。星の魔女の名のもとに？」

「えーっと、星の魔女の名のもとに……」

そのまま言くと、メリッサの顔が驚愕の色を示した。目からこぼれた涙が、地面に落ちて消えていく。

「師匠……」

メリッサはもう何も聞かずにアルトについて行った。アルトも無言で歩き続ける。疲れても疲れても歩き続けた。愛しい少女に、スピカに会うために。

その間、スピカたちの師匠からの連絡はなかった。だから、二人はひたすらまっすぐに進んでいた。

体力が続く限り歩き続け、ついに二人はへたり込んでしまった。今日はここで野宿をするしかないだろう。宿に泊まるにしても金はないし、

教会からの連絡がいつていたら困る。

「メリッサ、ごめんね、もう少し早く来ていれば、君は怪我をしなかったかもしれない……」

アルトは涙目でメリッサを見ていた。

否、実際にはメリッサのやけどの後を見ていた。

「何言ってるの、助けてくれたじゃない。」

「あんたがいなかったら、私は死んでいたわ」

メリッサは本能的な恐怖で身を震わせた。

彼が間に合わなかったら、確実に自分は死んでいた。

そのことが、今更ながらに怖かった。

「スピカは、今どこにいるのかしら？」

「分からない……。でも、スピカの師匠がまた

連絡をくれると思う……」

二人はたまたま持っていたチョコレートを半分に割って食べ、その日はそこで眠りに就いた――。

使い魔は魔女を追いかける（後書き）

アルトがついに店を出ていきます。
いきなり連絡してきたスピカの
師匠。星の魔女だと名乗る
彼女の正体は――？

魔女は教会の使者に襲われる

スピカールーンは、上空を箒で滑走していた。ぐんぐんとスピードを上げて走っている。

何も考えなくてすむように、彼女はただ箒を走らせていた。

そうしていないと、泣いてしまいそうだった。あまりにも彼と、使い魔であり、恋人のアルトと別れるのは辛かった。

「アルト……」

と、その時だった。

「いたぞ、魔女だ!!」

「魔女スピカールーン!! 降りてこい!!」

下の方で男たちが集まり始めていた。

スピカはあきれたようにため息をつく。

どこの世界に、殺されると分かって

自ら命令にしたがって降りる者が

いるのだ。いる訳がない。

「本当にしつこい……!!」

スピカは体内で魔力を練り始めた。

詠唱の輝きがスピカを包む。

スピカは男たちを殺すつもりだった。

殺らなければこっちが殺られる。

ここで死にたくはなかった。

詠唱が終わった。雷の塊が

スピカの手にはある。

男たちはギョッとなったように後退し始めた。

「逃げたって無駄!!」

スピカは雷の塊をかがけて男たちを

睨みつけた。今、ここでこれを落とせば
こいつらは死ぬ。スピカは助かるのだ。
だがー。

スピカはそれを落とすことができなかった。
アルトの悲しげな顔が浮かんだったのだ。
もし、スピカが身を守るためとはいえ、
人を殺したと分かったら、アルトは
悲しむかもしれない。

そう思ったらとてもできなかった。
「できない……」

手の中の雷はしだいに色を失い、
そのまま消滅した。スピカは悲しい
思いを抱えてそのまま移動する。

「くらえ、魔女っ!!」

「きやあっ!!」

しかし、敵は身の危険を感じたのか
攻撃に転じてきた。聖水入りの水鉄砲である。
大量の聖水が彼女を襲った。

肌が焼ける匂いがスピカの鼻をつく。
そのまま彼女は箒から転落し、
その場に叩きつけられた。

なんとか受け身を取り、威力を殺す。
完全には殺しきれずに、彼女は怪我を負ってしまった。

「姑息な手を……!!」

スピカは唇をかみしめながら、
男たちが水鉄砲を構えるのを見ていた。

一方、その頃。

ディオナ「コーラルは悩んでいた。

目の前に広がるのは、憎い敵である
かたき

スピカールーンが二人もの男たちに
囲まれている光景である。

彼女は怪我をしているらしく、
悔しげに睨みつけながら動かない。

今、動けばディオナは彼女を助けられる位置にいた。
反対に、動かなければ敵は死ぬ。

聖水が魔女や使い魔や魔法生物に劇薬に

近いのは、もちろん彼女だって調べ済みだった。

もしここで死ななくても、彼女は連れていかれて
火あぶりになるだろう。そうしたら、間接的に

ディオナは兄レヴァンの敵を討ったことになる。

だが、どうしても釈然としない思いがあった。

ここでスピカを見殺しにしたくない何かが。

「どうして？ どうしてあたしがこんな

ひどいやつを、魔女を助けなきゃいけないのよ」

言い聞かせてみても、心はざわつくばかり。

ここで見殺しにしたら一生後悔するような気もした。

ディオナはその気持ちを、「敵を奪われたくない
からだ」と勝手に結論づけ、彼女に向かって

ずんずんと大股で歩いて行った。

魔女は男たちを憎々しげに睨みつけていた。

動こうと努力はして見るものの、体が

上手く動いてくれない。

やっぱり体には相当のダメージが

加わっていたらしい。

聖水は魔女にはかなりの劇薬。それを

大量に浴びたのだ。

と、ここでスピカはあることに

気付いた。男たちの手が震えている。

彼らも必死なのだろう。

一歩間違えば、死の危険さえある魔女狩り。
それに挑んだのは、

きつと魔女と捕えて連れて行けば、
報奨金がもらえるからだろう。

彼らはプロではないのだ。

（あれを落とせば、逃げられる？）

スピカは男たちに見られないように

魔力を練り始めた。ごくごく少量の魔力だ。

これならば、相手が怪我をすることなく
撃ち落とすことができる。

（お願い……！！ 気がつかないで……！！）

だが、小粒の火球を放とうとしたスピカの
もくろみは外れた。こちらに攻撃して

殺そうとしていると勘違いした男たちが、

一斉に聖水を噴射してきたのだ。

スピカは悲鳴を上げ、その場に倒れ込んだ。

「う……くう……」

うめき声が響き渡る。スピカはよろよろと
手を出して立ち上がろうとしたけれど、

もうその力さえ残っていないようだった。

「おい、殺すなよ？ 報奨金が減るぞ」

「分かっているって。でも、あと一回

なら大丈夫だろ？ まだ意識を保っているようだしな」

「いいかげに……」

いい加減にしないで、そう言うつもりだった声は、
口がうまく動かずに相手には伝わらなかった。

後一度それをくれば、スピカは気を失って
連れていかれてしまうだろう。

こんな年で、こんなところで、死ぬのだろうか。

どうせ死ぬなら、アルトのそばがいい。

彼にもう一度会ってから死にたい。

スピカの目から涙があふれだした。

迫りくる聖水が、彼女には毒のように

思えてきた。何故か時間がゆっくりしている

気がする。スピカの目には、それがやけに

スローに感じていた。

と、その時間がついに終わった。

一つの影がスピカの前に飛び出して来たのだ。

その人物が聖水をかぶったので、

スピカに一粒さえもあたらなかった。

「あ、あなたは……！？」

驚きに見開かれる紅い目を、睨むように

少女の瞳が見つめていた――。

魔女は教会の使者に襲われる（後書き）

突然魔女が襲われる。

死にかける彼女を、

助ける少女。

彼女はどうなるのか！？

次回もよろしく願います。

魔女は少女に助けられる

自分をかばってくれているのは、
明らかに自分を敵^{かたき}だと

して襲ってきたあの少女だった。

名前はディオナ＝コーラル。

どうして彼女がこんなことをしたのだろう。

「誰だ、貴様は！？ お前も魔女か？」

「こんなやつとあたしを一緒にするんじゃないわよ！！」

ディオナが小さな体を震わせて吼える。

びくつ、とスピカは身をすくめた。

「あたしは魔女なんかじゃないわ！！」

肌も焼けてないんだから、見てみなさいよッ！！」

ディオナは肩をはだけさせると、必死で魔女で

ないことをアピールし始めた。

幼いとはいえ少女がそんな行動をしてきたので、

男たちは目をそらしつつ「もういい」と返した。

ディオナは鼻息も荒く服を正す。

「ふんっ、分かったらいいのよ！！」

スピカは訳が分からなかった。

彼女はいまだに憎々しげに男たちとスピカを

睨みつけている。その視線に、親しげな色は

ひとかけらたりともなかった。

だが、少女の態勢は明らかにスピカをかばっていた。

偶然でかばえるものではない。

それに、どうしてここにいるのかもわからなかった。

どうして自分をかばったりなどしたのだろう。

敵だと、殺してやると常日頃から言っていたのに。

「勘違いするんじゃないわよ！！」

スピカ「ルーン!!」

「え？」

「あんたを助けたんじゃないからね!!」

あんたを殺すのは、私なのよ!!

他の誰にも敵を譲ったりしないわ!!」

ドンツと力を込めて突き飛ばされ、

スピカはよろよろとその場を後退した。

キツと怒りを込めたような瞳が睨む。

「早く行きなさいよ、殺されたいの!？」

スピカは素早く身をひるがえした。

ありがとう、という言葉は胸に秘めて走り出す。

この少女には、今は聞きたくない言葉であろうから。

「待て、この魔女め!!」

「させない!!」

スピカを追いかけようとした男の一人に、

ディオナの蹴りが炸裂した。

男はディオナが人間であると知っているので、

手を出すことが出来ずにスピカが消えていくのを

悔しげに見つめていた。

（そうよ、私はあいつをかばったんじゃない。

敵を取られては困るもの。だからとりあえず助けただけよ。

それ以外のなにものでもないわ）

ディオナは自分に言い聞かせると、キツと目の前の

男たちを睨みつけていた。

スピカは息を切らせながら走っていた。

魔女狩りが始まった今では、馬車に乗ることも

できないだろう。万が一にも乗れたとしても、

その馬車の御者に降りた後で通報されるか、

馬車が襲われるかのどちらかだろう。

筭さえも失った今としては、スピカはただ走るしかなかった。幸いにも、ここには教会の使者はいない。

頬を真っ赤に染め、呼吸を荒くし、

ただ彼女は走るだけだった。

走れるだけ走ると、スピカは体力が付きかけてきたので少し休憩を取ることにした。

今は誰もいないので構いはしないだろう。

「ふう……疲れた」

のどがカラカラでお腹も空いたけれど、残念ながら水も食料も持つてはいなかった。

くううううつ、とお腹から音が鳴る。

ぎよっとなって周囲を見たものの、誰もいないので安心した。

「少し、やばいかも……」

そう思った時だった。

獣の悲鳴のようなものが聞こえてきたのだ。

気がつくと、スピカは森にほど近い場所にいた。

スピカは慌ててそこに近づいた。

すると、腹を空かせた魔物が獣、というか動物を襲っているではないか。

スピカは軽い炎の術で魔物を追い払い、

動物を助けた。普段はこんなことをしない。

腹が減ったら動物も魔物も死ぬ。

それが分かっているから手は出さない。

だが、悲痛な悲鳴が聞こえたのでつい助けていた。

スピカは一旦魔物に近づいて果物のようなものをあげると、抱き上げた動物と共にそれを食しながら歩き出した。みずみずしくおいしい果物である。

たくさんあるのでどの渴きもいやされ、お腹もいっぱいになった。

「お前、名前なんて言うの？」

「~~~~」

動物はスピカの言葉に、その動物特有の言語で語りかけた。スピカは頷き、

動物をなでる。その動物は長い耳をしていた。

ウサギ、というのに特徴がにているが、

尻尾はかなり長いので違うだろう。

「そう、リリアっていうのね。」

お前、女の子なの。親や兄弟は？」

「~~~~」

「そう、はぐれたの。一緒に来る？」

「~~~~」

「うん、分かった。一緒に行こうね」

ウサギに似た動物、リリアを抱きながら、

スピカはゆっくりと歩き出した。

森の中ならば、追手も来にくいだろう。

それに、食料が大量にあるのでちょうどいい。

スピカはそこでふと思い出して笑ってしまった。

「変なの。私、少し前までは一週間とか、

何も食べなくてもお腹なんか空かなかったのに」

研究していたら後は飢えなんかどうでもよかった。

さすがに水分は取っていたが、リイラが来ない時には

何日も食べない日が続いたのに。

それが変わったのは、アルト「ハルメリアが来てからだった。

彼は決して食べないことを許さず、いつ何時でも

三食作ってくれていた。

アルトのことを思い出すと、胸がひどく傷む。

目から涙をこぼし始めたスピカに、リリアは

なくさめるように鳴きはじめ、涙をなめた。

「泣かないで、って言うてくれてるの？」

「ありがとう……」

新たにできた相棒に微笑みながら、スピカはしばらく泣いていたー。

魔女は少女に助けられる（後書き）

スピカに新たな相棒ができました。
ウサギみたいな変わった動物です。
次回はアルト編にうつりますが、
どうか次のお話もよろしくお願いします。

使い魔は友と共に行動する

スピカ「ルーンが森に逃げ込んでいる頃。
使い魔、アルト「ハルメリアと、その友、
メリツサ「ウォーカーはあたりを警戒
しながら歩いていた。

誰もいないのを確認し、歩き出す。

メリツサはだんだん明るさを取り戻していた。
そのことがアルトには安心を与えている。

「スピカ、見つからないわね」

「うん……」

アルトたちは声を待ちながらスピカの
探索が続けていたが、いまだ見つけられずにいた。
スピカの師匠を名乗る者の連絡は途絶えている。
こちらから連絡する方法は分からないので、
どうしようもないのだった。

メリツサにも聞いてみたが、まったく分からないらしい。

「アルト……」

と、メリツサが悲鳴のような声を上げた。

草むらに何かがある。ガサガサと草をかき分ける
ような音がその場に響いていた。

「誰だ……！ 出てこい……！」

誰何すいかの声を上げるアルト。

一瞬、草むらの中が静まったが、
やがて一人の少女と少年が姿を現した。

「アルト、ひさしぶり」

「また会いましたね……」

レティーシャ・エルト・モランと、
イリオス「ウォーカー」だった。

レティは事情を知っているのか知らないのか、
にこにこと緊迫感もない笑顔である。

一方、イリオスは無愛想な感じだった。

無理やり子守りを押し付けられたのかもしれない。

「レティー様、イリオスさん!!」

「イリオスじゃないの!!」

嬉しそうに駆け寄るメリツサに、イリオスは苦虫を
かみつぶしたような顔になっていた。

彼はメリツサを、義理の母親を避けている。

「久しぶりね、本当に!! ぜんぜん会いに来ないんだもの!!」

「あなたにあいさつしたんじゃないありません」

「何よ。相変わらず無愛想ね」

頬をふくらませるメリツサ。その様子は、母親というより
友達に対するもののように思えた。

幼馴染だった頃の名残だろう。

誰のせいだと思ってる、思わずそう呟いたイリオスは、
睨むような目で見る彼女に詰問にあった。

彼女はイリオスの恋心も、父親に対する思いも、
全然知らないのだった。イリオスの目がさらにきつくなる。

事情を知っているアルトが、慌てて止めに入った。

「あの、二人はどうしてここにいますか?」

「あ、忘れてた!! 魔女狩りが始まったんだよね!?
スピカは!? あの子はどこにいるの!？」

レティの顔がかなり真剣なものとなった。

揺さぶられ、アルトは言葉に困って立ち尽くす。

「何があったの!? ねえ、答えてよ、アルトツ!!」

「スピカはいなくなっただんです。探しているんですが、
どこにもいません」

「そんなっ!!」

レティの顔がしだいに青ざめていく。

イリオスの顔も心配そうにしかめられた。
とー。

「いたぞ、魔女だ!!」

「あれ? でも、あいつスピカールじゃないよな?」

「こうなったら魔女なら何でもいい、連れていくぞ!!」

三人もの男たちがその場から現れた。レティは怯えて後ずさり、イリオスが構えていた剣を抜く。

メリッサたちも青ざめて下がった。

「逃げてください、母さん、アルト、レティ様!!」

「ここは俺が食い止める!!」

「で、でもイリオス!!」

メリッサが泣きそうな顔になった。

彼は彼女の血のつながらない息子である。

置いていけるはずがなかった。

「メリッサ早く!! イリオスは魔導師とかじゃないから大丈夫!! ここは逃げるよ!!」

「イリオス!! イリオス!!」

メリッサは両側からアルトとレティに連れて行かれた。

アルトは逃げながらも、スピカは危険な目にあっているだろうか心配になっていた。彼女が本気を出せば逃げ切れるだろう。

だけど、彼女は力をまともに出せるかどうか分らなかった。

「レティ様、巻き込まれないうちに城にお帰りください。」

あなたは魔女ではないんですよ!?

「嫌!! あたしここに残る!! 一人だけ温かい場所でぬくぬくしてるなんて耐えられない!!」

「エトワールだって協力してるんだよ!？」

「エトワール!？」

アルトが驚いたような顔になった。彼が動いているなんて初耳だった。彼は貴族であり、アルトたちの友人だが、魔導師でも何でも無い。

「どうしてエトワールが！？ 彼はどこにいるんですか！？」

「『カッサンドラ』に行ったー！！」

『占い喫茶・カッサンドラ』には、今、リイラ＝コルラッジがいた。

彼女は無事だろうか。殺されないことは彼女の発言から分かっている。

だけど、本当に手を出されないのが心配だった。そしてー。

「あっ！！」

アルトは額を手で打ってうめき声をあげた。不審そうに二人が走りながら見てくる。

「どうしたの、アルト！？」

「オリオンを忘れてきたー！！」

オリオンのことを知らないレティは首をかしげていたが、今にいたるまでアルトと同じように忘れていたメリッサは、血の気の引いた顔になっていた。

魔女狩りは魔女だけを狩るのではない。

魔導師・魔法生物・使い魔をも狩るのだ。

「オリオン、無事でいてー！！」

「ごめんね、オリオン……ー！！」

アルトたちは店に一旦戻ることにし、方向を変えてオリオン救出のために乗り出したのだったー。

使い魔は友と共に行動する（後書き）

エトワール、リイラ、オリオンが再登場します。次回の主人公は、珍しくリイラになります。次回もよろしく願います。

友人は店を守る

リイラ「コルラツジは男たちに睨みつけていた。

だが、彼らは意に介さずにまだ居座って搜索を

続けている。すぐに帰れ、と思ったが、もう

魔女も使い魔もない。

安堵しながら椅子に座っていた。

「いたぞ！！ 魔法生物だ！！」

リイラの顔から血の気が引いた。

今現在、魔女と使い魔は確かにいない。

だが、リイラはここにドラゴンがいることを失念していた。

「オリオン逃げて！！」

悲鳴のような声を上げるリイラをあざ笑うかのように、

男たちは首をかしげながら空中に浮くオリオンに銃口を向けていた。

「駄目ええええええっ！！」

響くのは銃声。リイラは体から力が抜け、へたへたと座り込んで

しまった。オリオンはぴくりとも動かない。

「あああああああ！！」

悲鳴を上げるリイラには一切構わず、男たちは文句を言いながら

店を出て行った。

「殺しちまったようだな。まあいいんじゃないか？

魔女や使い魔よりは料金も安いしな」

「ちつ。それでも少しは金になったぜ？」

「分かったよ。次は殺さねえって……」

リイラは叫ぶ力も立ち上がる気力も起きないまま、

うつろな目でオリオンを見つめていた。

かなりの時間が経った頃に、ようやく店に

誰かがやってきた。

「メリッサ、ちゃんと食べてるか」。

差し入れ持つて来てやったうわああっ!!」

最後の叫び声は、倒れた龍の子供と

リイラの姿が目に入ったからだだった。

「エト……ワール……」

エトワールは明らかに狼狽ろうたいしていた。

何を言っているのか、また、何をやってもいいかわからないのだろう。

「死んじゃった……この子、死んじゃったよ……」

エトワールは悲痛な声を聞き、かがみこんでオリオンに触れた。と、カツと目を見開いた

ドラゴンの子供が彼の手にかみついた。

「いいってえええええっ!!」

「オリオン、生きてたのね!!」

「こっちの心配もしてくれよ……」

慌ててエトワールはオリオンをひっつかみ、牙を手から放させた。

じつとりと血がにじんでいるが、

リイラはまったく気に掛けずに

オリオンを抱きしめていた。

仕方なく、自分で包帯を巻いて止血している。

「……で、あんた何でここにいるんだ？」

スピカやリイラはどこにいるんだ？」

「あなた、魔女狩りのこと知らないの!？」

「魔女狩り!？ 俺は何も聞いていないぜ」

リイラは首をかしげながらも、何も言わずにオリオンの様子を見た。ただの拳銃だったのが良かったのだろう、軽傷ですんだようだった。

聖水だったら、こんなに小さいのだから

ひよっとしたら本当に死んでいたのかもしれない。

「よかった、本当によかった……」

オリオンは警戒するようにエトワールに

唸り声を発していた。リイラはそれをとがめるように軽く頭を叩き、お茶の準備をするために彼に背を向けた。

オリオンはさらに大きく唸り、リイラは困惑しながらも放っておく。エトワールはにっこりと笑うと、

きらりと光るものを取り出し、それをリイラの背後

に向けて近づけ、彼女は一切気配には気づかず、

オリオンが唸る声と、リイラがかちかちと

カップを探す音だけがその場に響くのだったー！。

友人は店を守る（後書き）

最近シリアスなシーンが多くなってきました。

ほのぼの系なのを楽しみにしていた方は

すみません。もう少ししたら

単調に戻ります。

何故かリイラを狙うエトワール。

彼の目的は！？

次回もよろしく願います。

使い魔は男と遭遇する

アルト「ハルメリアは、走っていた。
隣にはメリッサ「ウォーカーもいて、
はあはあと息を切らせながらも同じように
走っている。

少し休みたいと思いつつも、そんな
余裕などないのが現状だった。

メリッサもアルトも文句など
言わずに走るばかりだった。

とー。

「よお、何やってんだお前ら？」

「「え、ええええエトワール！？」」

二人は急停止してそのまま転びそうになり、
慌てて足に力を込めてそれを阻止していた。

「な、なななななんているのここに！？」

「それがさー、俺も覚えてないんだよね。」

何か大事なことを忘れてる気がするけど」

アルトは訳が分からなかった。それは、

ここで頭を抱えているメリッサも同じであろう。

だが、良く見ると彼の目はどこか変だった。

アルトたちを見ているのに、どこか標準が合っていない。

口調もどこか変で、明らかにおかしかった。

アルトは気づかなかったけれど、メリッサは彼の様子が
おかしいことに気付いたようだ。

キッと睨むように彼を見つめていた。

「暗示でもかけられているのかしら。」

それとも魔術？ どうやって解けばいいのかしら」

困るメリッサ。そんな彼女を助けるかのように、

再びアルトの頭にスピカの師匠の言葉が響いた。
「光の術を使い、闇の術を打ち消せ。」

妹弟子にそう伝えるのじゃ？

「わ、分かりました！！」

アルトはそのままをメリツサに伝えた。

優しいほのかな光が彼女の手灯りに、
エトワールにそれを近づける。

エトワールはぼうつ、としたような
目でそれを見ていたが、やがてはつと
なったように焦点がメリツサを捕えた。

「メリツサ……？」

「エトワール！！ 正気に返ったのね！！
何があったの！？」

エトワールは頭をおさえて呻いた。

記憶が混乱しているのだろう。

しばらく彼は黙っていた。

しかし、かなりたってから口を開いた。

「変な奴にいきなり殴られたんだ。」

それから、訳が分からなくなって……」

「姫にあつたのはあなたなんですか！？」

アルトが重ねて問いかける。少し

考えてエトワールは頷いた。

だんだん思い出してきたようだ。

「そうだ！！ 俺は魔女狩りのことを聞いて
リイラに会いに行こうとしていたんだ！！」

「思い出したのね！！ じゃあ、早くリイラの
所に行かなくちゃ」

「その必要はない。私が送ってやろう。」

馬鹿な弟子の責任を取るのは私の役目だが、
今は動けない。止めてくれ、あいつを……？

それ以上声は聞こえなかった。

光が彼らを包み込み、次の瞬間には、
彼らは『占い喫茶・カッサンドラ』にいた――。

彼らが出会った少し前――。

キンッとかかたが弾き飛ばされる音がした。

きらめく刃が床に転がり、へたり込んだ

リイラは目を見開いて固まっている。

「エトワール……？」

カシャンツとカップが落下し、割れる音が響いた。

うつつつ、と威嚇するように再びオリオンが唸る。

この竜の子供が、リイラに投げられたナイフ
から彼女を守ったのだ。

硬いうろこにはじかれ、それは彼女に傷

一つつけることなく落下した。

「あんた……！ 教会の使者ね……！」

私は人間よ……！ 傷をつけてはならない掟

を守りなさいよ……！」

「残念だが、俺は教会の使者じゃない。

その掟には値しないね」

「じゃあ、あんた誰なのよ……！」

「冥途への土産に教えてやるよ。

俺はスピカの弟子、シユイアだ。

聞いて驚くなよ？ この騒ぎもすべて俺の仕業さ」

リイラはぎよつとなり、男を睨みつけながら立ち上がった。

スカートのほこりを払い、彼を問いただす。

「どうということなの？ あんたの目的は何……！」

「スピカさ。俺に初めて黒星をつけたあの女を、

完膚無きままに叩きつぶす。それが俺の目的だよ。

教会のやつらを全部操って行動させてやったのさ。

あんたは知らないかもしれないけど、教会と魔女たち

は組織として結託していたんだ。それを壊すのは簡単だったぜ？」

狂ったような笑い声が響き渡る。

シュイアと名乗った男の顔は、あきらかに異常者の顔だった。

スピカのためにこんなおおごと发展到させたとは彼は言う。

すべての魔女や使い魔、魔法生物たちを巻き込んで。

「俺のことをすべて知ったあんたに、生きる価値なんてないね。

さあ、死になっ――！」

「くっ……」

男の手がリイラの細い首を締めあげる。

リイラは抵抗ができなくて青ざめるばかりだった。

「やめ……なさいよ……こんなことして……

なんに……なるって……」

「うるさいな、少し黙れよ」

「っ！？」

シュイアはリイラの言葉を封じた。

リイラはじたばた暴れるが、さらに苦しくなるだけだった。

力が抜け、顔が白み始めたその時に、

扉を蹴破る音が聞こえた――！。

使い魔は男と遭遇する（後書き）

ついに男の正体が分かります。
陰謀に巻き込まれたリイラたち。
スピカは無事でいられるのか！？
次回もよろしく願います。

魔女は葛藤する

スピカ「ルーンは走っていた。

腕には奇妙な動物を抱いている。

何かに追われているようだった。

頬を紅潮させ、足をもつれさせながらも、

スピカは必死で逃げまとう。

動物はただ鳴くばかりだった。

「待て、スピカ「ルーン」！

大人しく掴まれ！！」

「待てと言われて、大人しく待つ

馬鹿がどこにいる！？」

後ろから追いかけてくる男に、

スピカはツツコミを入れながら走っていた。

それはそうだろう。

待てと言われて待つのは、飼い犬か、

よっぽどの馬鹿である。

古今東西繰り返されて来た

かけあいをしつつも、スピカはあせっていた。

リリアという名の動物をしつかりと抱き抱えながら

彼女は必死で男との距離を開けようとしている。

とー。

リリアが急にスピカの腕の中で暴れ始めた。

驚くスピカの前で、ぴょいんと跳ねて

抜けだしたリリアは、そのまま男の方に向かって行った。

「リリア、危ないっ！！ やめなさい！！」

スピカが慌ててリリアを追いかけた。

リリアはぐるぐると男の周りを回っている。

星のようなきらめきが周囲に飛び散り、

男の顔が穏やかな顔になっていく。

「あれ……？ 俺、何やってたんだ？」

「え……？」

スピカは驚いたように目を見開いていた。

男はさつきとは様子が違く、スピカを見る目にも侮蔑やその他の悪い感情がうかがえなかった。

再び、リリアがぴいんと跳ねつつ

スピカの腕に収まる。

と、声が聞こえてきた。

「スピカよ、わらわの声が聞こえるか？」

「師匠！？ どこにいるのですか！！」

「落ち着くのじゃ。わらわは、そちの

近くにはおらん。リリアは役にたったみたいじゃな？」

「この子、師匠が……」

スピカは紅い瞳に涙を浮かべた。

温かい気持ち胸に広がっていく。

「シュイアが動き始めた。リリアを連れ、

使い魔たちのもとへ急ぐのじゃ？」

「シュイアが？ でも、師匠！！」

私は、彼らを巻き込みたくはありません」

「もう巻き込まれておるのじゃ。」

メリッサたちは、シュイアの目的を

すでに知っており。彼らと会うのじゃ」

「待つて！！ 師匠！！ 師匠！！」

声はとぎれて聞こえなくなった。

スピカは青ざめた顔で座り込んでいる。

アルトたちを巻き込ませたくない

姿を消した。だけど、結局は巻き込んでしまったのだ。

私が、彼らに会ったから。

彼らを好きになったから。

もう会っちゃいけない。

そう思うのに、スピカの心の奥で

会いたいと深く思う気持ちが膨れ上がってきた。

エトワールに、メリッサに、リイラに、

レティに、そして、なにより、アルトに――。

会いたい。また会って話したい。

一人はもう嫌だった。

そんな彼女の心を見透かしたように、

ぐいぐいとリリアが口で彼女の服の袖を引いていた。

行こう、と。彼らに会いに行こう、と。

スピカは涙を袖でぬぐうと、リリアをしっかりと

抱きしめて歩き出した――。

魔女は葛藤する（後書き）

スピカがついに彼らと

接触をはかります。

次回はアルトたちと

教会の使者の戦いです。

次回もよろしくお願いします。

魔女は弟弟子のたくらむを阻止する

アルトたちが部屋に駆け込んだ時、

チツと舌打ちをしたシュイアが彼女から身を離れた。

リイラがせき込み、慌ててエトワールが駆け寄る。

リイラは背中に手をあてられて一瞬抵抗したけれど、

彼はさっきの男とは違うと思い直して大人しくなった。

アルトはキツとシュイアを睨みつけている。

メリッサは驚きを隠せない様子だった。

スピカと同じように、彼女にとっても

シュイアは弟弟子だ。

その彼が、こんなことをするなんて、と。

「あんだ、何でもこんなことをしているの!？」

人を殺そうとするなんて、師匠がどんなに

悲しむと思うの!？」

「うるせえよ」

「きやあつ!!」

「「メリッサ!!」」

男がキツとメリッサを睨みつけると、

衝撃波が発生して彼女は吹き飛ばされた。

壁に叩きつけられ、そのまま手を伸ばした

状態で気を失う。

「なんてことを!! あんたたち、兄弟弟子なんでしょっ!？」

リイラはメリッサを抱き上げながらシュイアを睨みつけた。

しかし、彼はおかしそくに笑うばかりだ。

狂っている……。

彼女はその言葉をあえて言わなかった。

そう考えたのは、彼女だけではないだろう。

アルトも、エトワールもそう思っているのが明らかだった。

「兄弟弟子だよ。それがどうかしたか？」

「あんたねえっ！！」

「リイラ！！ 馬鹿に何を言って無駄だよ」

なおも言い返そうとしたリイラに、アルトが彼にしてはきつい口調と言葉でいさめた。

シユイアの表情が変わり、今度はアルトを睨むように見た。

「なん……だと……？」

「だって馬鹿でしょう？ スピカを倒すためだけに、こんな大掛かりなことをやっただけで言っただけよ？」

「そんなの馬鹿がやることだよ」

「てめえええええっ！！」

彼がアルトに飛びかかった。

アルトはそれを読んでいたので飛び退ってよける。

だが、アルトは彼の能力をすっかり忘れていた。

ぎろりと睨んだシユイアに反応するように、

扉から何者かが侵入してきた。

憎むような目をした者たちがぞろぞろとやってくる。

「あんまり俺を怒らせるんじゃないよ」

「アルト！！ 傷つけちゃ駄目よ！！」

この人達、皆こいつに操られてるの！！」

「そ、そんなこと言われても……！！」

奇声をあげて手にした武器で飛びかかってくる男を、とつさに近くにあつた麵棒で止めるアルト。

その際に、少し回復したリイラが鋭い声を

上げたので、歯を食いしばりながら手のしびれに耐えていた。

このどさくさで、いつの間にかシユイアは消えていた。

「こうなったら、戦うしかないわよ！！」

あまり怪我はさせないように、だけどね！！」

メリッサもエトワールも武器を取り始めた。

とはいっても、ケーキ屋であるので、ホイッパーや

フライパン、などしかないのだが。

包丁は危険なので使えない。

「私も、戦う!!」

リイラも箒を手にして戦い始めた。

操られているとはいえ、そんなに強くないらしく、教会の使者たちは四人に押されていた。

しかし、あまり傷は付けないようにという

制限のある戦いだ。

やりにくいことはこの上ないだろう。

「このまま、気絶させちまった方がいいんじゃないか!？」

「それがいい、わね!!」

「ごめんなさい!!」

リイラが持てるすべての力を箒に込め、

男の一人の頭を叩きつけた。

予想以上の力が入ったのか、男が気を失う。

アルトたちもそれぞれの武器を使って教会の使者たちを倒す。

「早く、あいつを追わなくちゃ!!」

そのまま四人は外に出ようとしたが、さらにはかなりの人数が店に入り込んできたためにできなかった。

「あいつ、なんてことをしてくれたのよ!!」

「こんなに、倒しきれないよ……」

「そんな……」

「皆、弱気になるな!!」

リイラたちがへたり込み始めてしまった。

手は痛いし、彼らをむやみに傷つけてはいけないから、戦う気力はだんだんそがれていった。

エトワールが叫ぶが、彼もまた気力が

そがれているのは確かな事実である。

「ちくしょう……どうしたら……!!」

「皆、目を覚まして!!」

少女の声が響き渡ったのはそのすぐ後だった。

奇妙な生き物を抱いた少女が店に飛び込んできたのである。

その少女は、紅い目に白い髪をしていた。

彼らが探していた人、スピカールンその人である。

奇妙な生き物――、リリアがぴよんぴよんと

男たちの周囲を飛び回る。

しだいに、憎しみの顔が消え、

彼らは穏やかな顔に戻って行った。

「目を、覚まして――！」

さらにスピカはリリアを抱きながら祈り始める。

まばゆい虹色の光が両者の体からあふれ出し、

世界を包むかのような強い強いものとなった。

アルトたちは訳が分からないと言ったような

顔でそれを見守る。

世界で、異変が起きていた。

魔女を狙っていた者たちが、しだいに穏やかな顔を取り戻す。

戦っていた者たちが、動きを止める。

ディオナが、エリオスが、レティーが、

今にも泣きそうな顔になって動きを止めていた。

温かき光が世界中にあふれていく。

いつの間にか、アルトたちの目にも涙が浮かんでいた。

こうして、スピカの弟子、シュイアのたくらみは、

とりあえずは阻止されたのだった――。

魔女は弟弟子のたくらむを阻止する（後書き）

ついにスピカがアルトたちと

再開します。次回は

もう一話の後、日常編に戻ります。

魔女と使い魔は二人で会話する

スピカ「ルーンは、不安な面持ちで歩いていた。

隣には、使い魔のアルト「ハルメリアがいる。

彼は再開を喜んでいるのか、それとも

勝手にいなくなったことを怒っているのか、

悲しんでいるのか、まったく見えない表情をしていた。

スピカは彼といるのが気まずくて仕方ない。

彼の幸せのために手を離れた。

彼だけは幸せになって欲しくて。

だけど、スピカは簡単に戻ってきてしまった。

いや、実際には悩んで悩んで決めたことだけれど。

「……スピカ」

アルトが立ち止り、名前を呼ばれたスピカはびくつとなった。

慌てて立ち止り、彼の瞳を見つめる。

紅い目と青い目がかちあった。

スピカの体が小刻みに震える。

何を言っているのか、また何をやっていいのかが

まったく分からなかった。ためらう彼女に、

アルトは音もなく近づいて優しく抱きしめた。

「どうして、黙っていなくなったりしたの？」

アルトの腕に力が籠った。

スピカが痛くないと感じる程度の力だったが、

それでもスピカは彼の怒りを感じ取っていた。

「あなたを、危険に巻き込みたくなかったの。

あなたにはこれは関係のないことだったから。

危険な目に遭うのは、私だけでいい」

「僕はあなたの使い魔だよ！？」

どうして、関係ないだなんて言うの！？」

「……っ!!」

アルトの手にさらに力が込められた。

今度は悲鳴をあげそうになるぐらいの力だった。

スピカはあえて声をあげなかった。

彼の心の痛みを感じた気がしたから。

「僕の幸せは、僕が決めます。」

あなたがそばにいないと、僕の

幸せはないんです!!」

「アルト……」

「あなたがいない未来も、何もかもいらない。

一生逃げる生活だっていい、あなたとならば

どこへだって逃げて見せる」

スピカは気づくと泣いていた。

赤い目からとめどなく涙があふれ出す。

目をこすつても、こすつてもどんどん

あふれ出して止まらなかった。

「二度と、僕のそばから離れないで、スピカ」

アルトの目からも涙がこぼれおちていた。

彼らの涙はまるで星のようにきらめきながら、

地面にしたりおちていた。

アルトは手の力を弱め、スピカはようやく

安心したように息を吐いていた。

「スピカ、好きだよ」

「私も、アルト」

二人の唇が重なった。

甘い口づけがスピカの白い頬を紅潮させていく。

はあっ、とどちかからともなく熱い吐息が

二人の口から漏れ出ていた。

長い長い口づけだった。

しばらくして、スピカは恥ずかしそうに

彼から身を離そうとしたけれど、アルトはそれを許さず彼女を解放しようとしなかった。

「アルト、離して」

「駄目。しばらく会っていないんだもん、これくらいは許してよね？」

「もう、充分、したのに……」

「僕はまだ充分じゃないから」

アルトはなおも彼女の唇にキスを重ね、彼女の顔はまるでトマトのように耳まで赤くなっていた。

スピカは抵抗しようとしたが

使い魔になる際はかなり握力が強くなっている

アルトに、同じ年の少女にも劣る力の

スピカが敵う訳もない。

無理やり力で押さえ込まれてしまい、

アルトが唇だけでなく耳や頬や額に

までキスをするのをこらえるし

なかったのだった。

珍しく楽しげな笑みを浮かべたアルトは、

彼女が泣きだしてしまうまでキスを

続け、スピカは二度と彼を置いていなくなったりしない心で誓ったのだったー！。

魔女と使い魔は二人で会話する（後書き）

あまり二人の行動に進展がなかったので、今回は甘甘を目指してアルトに頑張らせました。次回からは日常編に戻ります。

魔女は使い魔と共に新たな生活をする

スピカ・ルーン達は、住居を森の中に移していつもの生活を始めることにした。

リイラ「コルラツジ、レティ、メリツサ「ウォーカーのエトワールの協力により、どんどん家が出来上がっていく。

無論、スピカやメリツサは魔術を使っているのだが。

「皆、手伝ってくれてありがとう」

スピカがにつこりと笑って言う、エトワール達は照れたように笑った。

特に、アルトの顔が一番赤かった。

少し彼女の服を引くと、彼は昨日のことを小声で謝った。

「昨日は、すみませんでした。調子に乗りすぎました」

「次からは気をつけてね」

スピカは真つ赤になったのをごまかすために

わざと冷たい声で言った。アルトが少ししゅんとなり、

スピカはちよつと言い過ぎたかなとも思ったけど

フォローはしないで仕事に戻った。

そうこうしている間に、エトワールがハンマーで

指を打つなどのハプニングもあったが、家は完成した。

前にここにあった小屋と寸分違いもないデザインだ。

後はここを花壇にして、鳥小屋も立てて、と相談

しているエトワール達を尻目に、スピカは安堵の息を吐き出した。

「なんとかなったようで、よかった」

「あら、それより、スピカはアルトとまた一緒に

暮らせるのが良かったんじゃないの？」

「リイラ！」

リイラがそうからかってきたので、スピカは

怒りを爆発させて叫び、アルトがびっくりしたような

顔になっていた。

「もう、リイラとレティは帰って!!」

……レティは、そろそろアカネが迎えに来る時間でしょう?」

「二人つきりになりたいのね、アルトと。スピカもかわいいところがあるじゃないの」

「いい加減にしないと、出入り禁止にするわよ!!」

からかわれるたびにスピカの顔は真っ赤に染まり、ついには耳まで赤く染まっていた。

レティはその意味が分からないらしくきょとんとしている。

リイラはくすくす笑っていたけれど、エトワールに村まで送ってくれるように頼み、同じようににやにやと笑っている彼と共に帰って行った。

「じゃあ、私も帰るわ。ダーリンが待つてるし

アルト、スピカと仲良くね!!」

「か、からかわないでくださいよ!!」

今度はメリッサにからかわれたアルトの顔が真っ赤かになった。

メリッサもダーリンが待つているからと帰ってしまい、

後には顔を赤くした二人だけが残された。

ちなみに、レティもアカネがちゃんと迎えに来て

帰って行ったそう。

否、まだオリオンとリリアがいた。

楽しそうに戯れている。この二匹は仲がいいようだ。

オリオンは多少の知識は得たのか、もう壁を食べたりは

しなくなっていた。アルトの作った料理にほれ込んだ、

というのもあるのだろう。

「じゃ、じゃあ帰ろうか、スピカ」

「う、うん……」

二人はぎこちなく手をつなぎながら、オリオンとリリアに声をかけると出来たばかりの家に入った。

ちよこちよことオリオン達もついていき家に入る。

と、そこでハプニングが発生した。

くう、とスピカのお腹から腹の音が鳴ったのだ。慌ててスピカは手を放すと、ばたばたと振りながらごまかそうとしたがごまかしきれなかった。

「……お腹減ったの？」

「……うん」

アルトはちよつと笑いながらすぐにキッチンに入っていく、メリッサやレティやリイラが新築祝いにくれた調理器具や材料をすぐに出すと料理を始めた。

しばらくして、彼がたくさんの料理を手に戻ってきた。お肉や野菜がたっぷり入ったコンソメスープ、焦げ目がほどよくついたポテトのパンケーキ、

デザートにチョコレートケーキが五個も出された。お腹がすいていたスピカは、ぱくぱくと笑顔で食べ始め、それを久しぶりに見たアルトの笑顔はとても幸せそうだったという。

スピカの方も、久しぶりに彼のおいしい料理を食べられて幸せそうだった。

彼らの足元では、リリアとオリオンがチーズのカップケーキを二匹で分け合って食べている。

彼らはようやく戻ってきた幸せを堪能しながらお互いに笑いあうのだったー。

魔女は使い魔と共に新たな生活をする（後書き）

ようやく投稿できました。

見てくださっている方、

投稿が大幅に遅れてすみません。

しばらくは日常編でほのぼの
で書こうと思っています。

魔女と使い魔は日常を満喫する

スピカ「ルーンは目覚めた時、一瞬どこにいるのかが分からなかった。覗き込んでくるのは、使い魔のアルト」ハルメリアの青い目だった。

びっくりして飛び起きる。

ガツ、と頭が彼の顎を捕えたため、悲鳴を上げた

アルトがごろごろとその場に転がってのたうちまわっていた。

「……うつつうつつ!!」

「ご、ごめんアルト大丈夫!？」

アルトはすぐに笑顔になったが、その目には涙がたまってたままだった。かなり痛かったようだ。

スピカはひらりとベッドから飛び降りると、魔法を使つて塗り薬を召喚した。

久しぶりに魔法を使ったので、ある種の

解放感に彼女はホツとする。

「動かないでね」

「いたっ!! いたたたいたっ!!」

「騒がないの。男の子でしょう?」

「……それ、元凶のあなたに言われたくないんだけど」

そう言われたスピカはアルトに目をあわさずにスルーした。

アルトが半泣きになるがそのことには触れなかったという。

手当てが終わると、アルトは湿布をあてられた位置を

さすりながらスピカに食事を出してくれた。

今日のメニューは、野菜がたっぷり入ったスープ、

焼き立てふわふわのパンがたくさん、カリカリに焼いたベーコン、

舌触りのいいスクランブルエッグ、ポテトサラダに蜂蜜まであった。

デザートには、もちろん『占い喫茶・カッサンドラ』のケーキ

全品がずらずらと並んでいた。昨日メリッサ「ウォーカー」が

サービスだと言っておいでいったのである。

アルトのおかげで大食漢ではないものの、それなりに食べられるようになっていたスピカは黙々と食べ始めた。砂糖を入れたミルクをテーブルに置きながら、アルトは喜んで食べている彼女をほほえましそうに見ている。

「いつか、メリッサに勝てるかな……」

「アルト、何か言った？」

「えっ！？ う、ううん何でもないよ」

一瞬悲しげな顔をしたのをめざとくスピカに見つけられたアルトは、

ごまかすためにスピカにミルクを差し出した。

いぶかしそうな目で見てくるけれど、アルトは食堂を出て行った。洗濯や掃除はまだしなくてもいいので、そう言って逃げることもできなかったのである。仕方なく、アルトはリリアとオリオンに食事を出すことにした。自分の食事は後だ。

子供っぽい嫉妬を彼女に知られたくなかったのだった。

彼女はそれを聞いたら赤くなって、それから笑うだろう。

でも、朝から笑われているのにこれ以上笑われなくなかった。

ともかくも、アルトはようやく戻ってきた日常に喜びを

感じていた。今日からはスピカ達と一緒にまた過ごせるのだ。

騒がしくも楽しい毎日が待っているのだ。

その時だった。

『おっはようっうっうっ！！』

「うわあっ！！」

昨日別れたばかりだというのに、仲間達が

集結していたのだ。レティカエトワールに

連れてこられたらしい人物がそっぽ向いていたけれど。

（ちよっとは遠慮してほしいんだけど……）

アルトは思わずそう思ってしまったが、口には出さなかった。言っても無駄だからである。

彼らが今更従うとも思えなかった。

「……すみませでしたね。彼らが無理に押しかけて」
イリアスがため息交じりに言った。

気を使っているのは彼だけのようだ。

エトワールは気づいていても気を使わなそうだが。

「皆、いらつしやい」

スピカが走り出てきたので、アルトは彼らに
帰ってもらうことができなかったという。

今日もスピカはリイラにもらった星の髪飾りを
つけている。いつか、彼女に自分も髪飾りを

プレゼントしたらつけてくれるかな、とアルトは思った。

騒がしい事この上ないけれど、今はそれでもいいかと思う。
スピカも、リイラも、エトワールも、メリツサも。

イリアスさえもいるこの空間が、騒がしい日常が
ようやく帰って来たのだから。

魔女と使い魔は日常を満喫する（後書き）

二か月も投稿してなくてすみません。

ネタを探しまくって少しずつ書いていました。

これからの予定は、日常編を数話書いたら

また少しシリ阿斯を入れる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7402l/>

魔女と使い魔のバタバタな日々

2011年9月5日17時22分発行